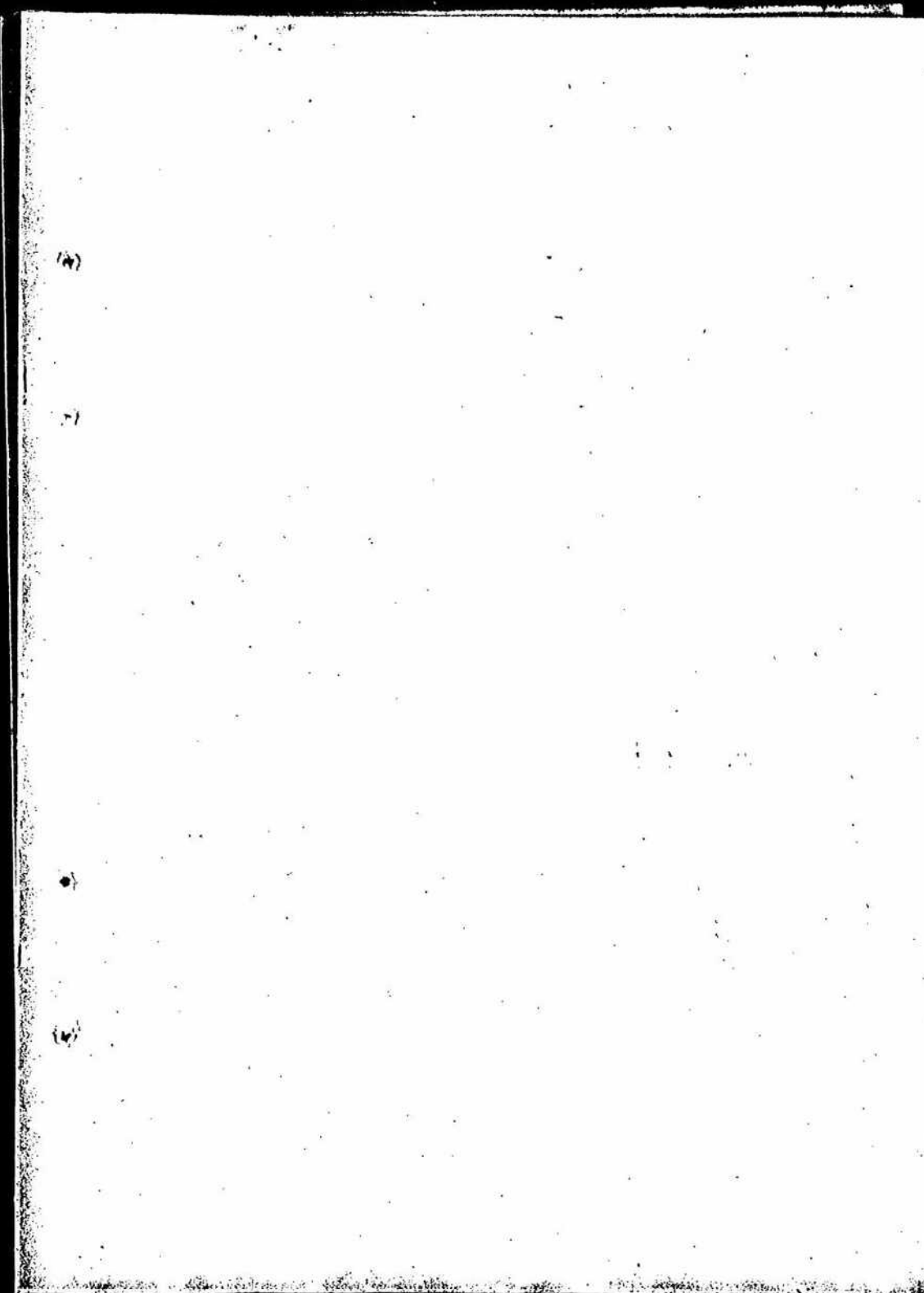




国立公文書館	
分類	③ ④
配架番号	3 A
	14
	70-20



ND 50-1217

昭和十九年第十陸軍技術研究所研究報告

第十陸軍技術研究所

軍
機
密

適用
規則第七條

3281

国立公文書館

分類

配架番号

70-20

第 一 號

一四	一三	一二
第十	第十	第十
技	技	技
研	研	研
四	三	二
研	研	研
報	報	報
一二月一七日	一二月六日	一二月五日
木製大發動機研究報告其ノ二(組立式木製)	鐵製大發動機切齒法研究報告	驅逐艇第四型式研究報告

軍事極秘

編則第七十一條
適用

用済後焼却
整理
番號

34

部ノ内
1號

昭和十九年九月四日
第十陸軍技術研究所

十技研研報第一號(○舟4)

願逐艇第二型式研究報告

裏面白紙

驅逐艇第二型式研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年二月十三日附兵政技密第三九號訓令ニ依リ航空々冷發動機ヲ裝備スル驅逐艇第二型式ノ研究ヲ開始ス

一 判 決 第二研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

驅逐艇第二型式ハ構造及機能共ニ良好ニシテ實用ニ適ス
ニ 將來ノ處置

1. 整備用圖書ヲ完備ス

2. 必要ニ應ジ整備ニ關スル技術指導ヲ實施ス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

昭和十九年一月末研究ヲ開始ス

ニ 設計

昭和十九年二月末基本設計ヲ完了シ同年三月末細部設計ヲ概成ス

試作

1 試作工場 三菱重工業長崎造船所

2 試作経過

昭和十九年四月 十日

起 工

六月二十二日

進 水

七月二十日

試作完成

四 試 験

自 昭和十九年七月二十四日

至 昭和十九年七月二十七日 間長崎市三重沖ニ於テ試作艇ハ完成検査ヲ兼ネ連続航走試験、速

力試験、操舵及旋回力試験等ヲ實施ス其ノ結果各部ノ機能概ネ良好ナルモ細部ニ於テ一部改

修ヲ要スル點アルヲ認ム

五 改 修

試験後所要ノ改修ニ著手シ昭和十九年八月十日之レヲ完了ス、再検査ノ結果所期ノ成果ヲ收

メ得タルヲ認メ研究ヲ終了ス

第四、驅逐艇第二型式概説

一、目的用途

主トシテ沿岸ニ於ケル驅逐及對魚雷艇戰闘ニ使用ス

二、構造機能ノ大要

木製高速艇エシテ附圖ノ如キ一般配置ヲ有ス

驅逐艇第一型式トノ相違ハ空冷機關ノ使用、兵装ノ強化及船体構造ノ一部改造ニ在リ

(一) 船体部

1. 船型

▽底ヲ有スル半排水型ニシテ稜角部ニ氷返シヲ附ス

2. 船体構造

イ龍骨ハ櫓艙上下三材ニセトシ其ノ上ニ楯又ハ桁等ヨリ成ル肋骨ヲ配置ス肋骨ノ心距

ハ一般ニ之ヲ太〇〇耗トシ楯部ヲ四〇〇耗トス

ロ外板及甲板ハ櫓又ハ枹艙「ベニア」板(尿素係合成樹脂接着劑ヲ使用ス)トシ其ノ厚

サヲ甲板及側板ニ於テ一二耗(六耗二枚合セ)底板ニ於テ一八耗(六耗三枚合セ)ト

ス

又外板及甲板ニ敷條ノ目板ヲ配置シ底板及甲板ニ二及四本ノ縦通材ヲ設ク

ハ主機室ハ機關圓形房洞ヲ放射狀ニ支持スル鋼製構造トシ其ノ上方ヲ機械室鋼製天蓋ニ支持ス、又排氣孔(二箇)ハ天蓋上面ニ吸氣孔(一箇)ハ其ノ後側面ニ之ヲ設備ス

3 諸室配置

イ甲板中央部ニ操舵室ヲ設ケ甲板下ニ倉庫兵員室、藥庫、兵員室、無線室、機銃室、彈藥庫及燃料油槽室ヲ設備ス

ロ操舵室ハ「ベニア」環形構造物ニシテ前面及後面ニ窓ヲ後部ニ出入扉ヲ又後方上部ニ遮風板ヲ設ケ所要ノ通信連絡設備ヲ有スル指揮所ヲ備ヘ操舵器、羅針盤、及速力通信器等ヲ保有ス

ハ諸倉庫ハ船体屬品ヲ格納ス

ニ兵員室兼彈藥庫ハ腰掛及彈藥箱(三七耗用)等ヲ有ス

ホ兵員室ハ兵員ノ休憩ニ用ヒ室内ニ腰掛及飲料水櫃(二〇〇立入)ヲ設備ス

ヘ無線及ら號室ハ夫々無線機及ラ號計器ヲ設置シ且所要ノ附帶設備ヲ備フ

ト機銃室ハ主機補機及關係裝置等迴轉ニ必要ナル諸機械裝置ヲ收容ス

チ彈藥庫ハ二〇耗高射機關砲用彈藥及爆雷ヲ格納ス

リ燃料油槽室ハ七五〇立入楕圓形油槽二個ヲ又操舵室下部後方油槽室ハ九五〇立入圓形油槽一個ヲ收容ス

4 舵

一個トシ之ヲ機中中央下面ニ設ク

5 其ノ他

イ甲板上ニ「ピット」「ラエアリーダー」「クリード」等ノ曳航繫留裝置ヲ設ク
ロ操舵室前方及機關室天蓋後方ニ樁ヲ植立シ其ノ間ニ空中線ヲ展張ス

(二) 機關部

1 主 機 關

主機關ハ航空々冷發動機(星型)ニ基トシ其ノ周圍ヲ風洞ニテ覆ヒ機關室後方甲板ノ吸氣口ヨリ空氣ヲ吸入シ主軸ニ直結セル風扇ニ依リ之ヲ冷却ス

機關ノ回轉方向ハ兩舷機共端ヨリ見テ左廻リトス

軸繫裝置

軸系装置ハ中間軸逆轉機「クラツチ」主軸船尾管等ノ各部ヨリ成ル逆轉機及「クラツチ」ハ中間軸（六馬力始動電動機ヲ有ス）ヲ介シテ夫々左右兩舷機ニ連結シ其ノ動力ヲ主軸ニ傳達ス

主軸（爪型回轉止ヲ有ス）ハ其ノ一端ヲ逆轉機又ハ「クラツチ」ニ連結シ船尾管ヲ經テ艇外下面ニ突出シ端末ニ一個ノ推進器ヲ裝備ス

3 推進器

三枚翼ノモノ二個ヲ裝備ス

4 唧筒

艇内ニ左ノ唧筒ヲ裝備ス

燃料移動用手働「ポンプ」

滑油移動用手働「ポンプ」

海水呼水用手働「ポンプ」

ピルチ用手働「ポンプ」

5 油槽

艇内ニ左ノ油槽ヲ設備ス

- 燃料「タンク」(七五〇立入) 二
- 燃料「タンク」(九五〇立入) 一
- 燃料集合「タンク」(一〇立入) 一
- 滑油貯蔵「タンク」(一六〇立入) 一
- 滑油循環「タンク」(四〇立入) 二

6 其ノ他

所要部位ニ滑油冷却器諸計器諸管機器弁及「コック」類等ヲ設備ス

(三) 電 氣 部

1 電 源

機關給動用照明用及連絡用電源トシテ機關室内ニ二四V一八〇AH蓄電池ヲ又無線及ラ號用電源トシテ兩室内ニ二四V一二〇AH蓄電池ヲ設備ス其ノ充電ハ右舷機ヨリ「ベルト」ニヨリ傳導スル二四V一二KW直流發電機一基ニ依リ之ヲ行フ

2 電氣機器

二四V六馬力始動電動機二基照明裝置及通信連絡裝置等ヲ主トス

(四) 兵 裝

1 三七耗舟艇砲

備甲板之上ニ之ヲ裝備ス

2 九八式二〇耗高射機砲

機砲室後部甲板上ニ之ヲ裝備ス

3 爆雷投下機

機部兩舷ニ之ヲ裝備ス各器ハ三式爆雷四個ヲ收容ス

4 爆雷

投下機ニ八個彈藥庫ニ四個ヲ收容ス

5 無線機

無線室ニ船艇無線機甲ヲ裝備ス

6 號裝置

右舷々側ニ送受波器ヲ甲板上ニ其ノ架及操縱裝置ヲ號室ニ其ノ他ノ計器類ヲ設備ス

主諸元

全長

一八米〇〇〇

最大幅

四米三〇〇

排水量及吃水	深	輕荷狀態	常備狀態	滿載狀態	航續距離	速力	最高	常用	最低	主機	型式	數量
排水量	二米〇〇〇	一六〇七九八	二一〇二一四	二一〇九六一	約二〇〇浬	二五・七節(公試狀態)	二一・〇節	九・〇節				
吃水(平均)		〇米五九〇	〇米六六九	〇米六八一								
											九七式六五〇馬力航空冷發動機	二基

最大軸馬力	九三〇馬力(公試狀態)
毎分回轉數	一二〇〇(公試狀態)
最常用	一八〇〇
最低	八〇〇
推進機	二
直徑	〇米六一〇
ビツ	〇米七三〇
展開面積	〇・二二〇〇平方米
回轉數	一六五〇(毎分)
兵	一六五〇(毎分)
三七糎舟艇砲	一門
九八式二〇糎高射機關砲	一門
爆雷投下器	二基
船艇無線機甲	一式

ら 號 裝 置 一 式

第五機(秘)密兵器ノ取扱區分

軍事極秘

第六研究 擔任者

科 長 陸軍中佐 内 山 鐵 男

主任者 陸軍技術大尉 佐 藤 茂 男

陸軍技術中尉 島 田 茂 良

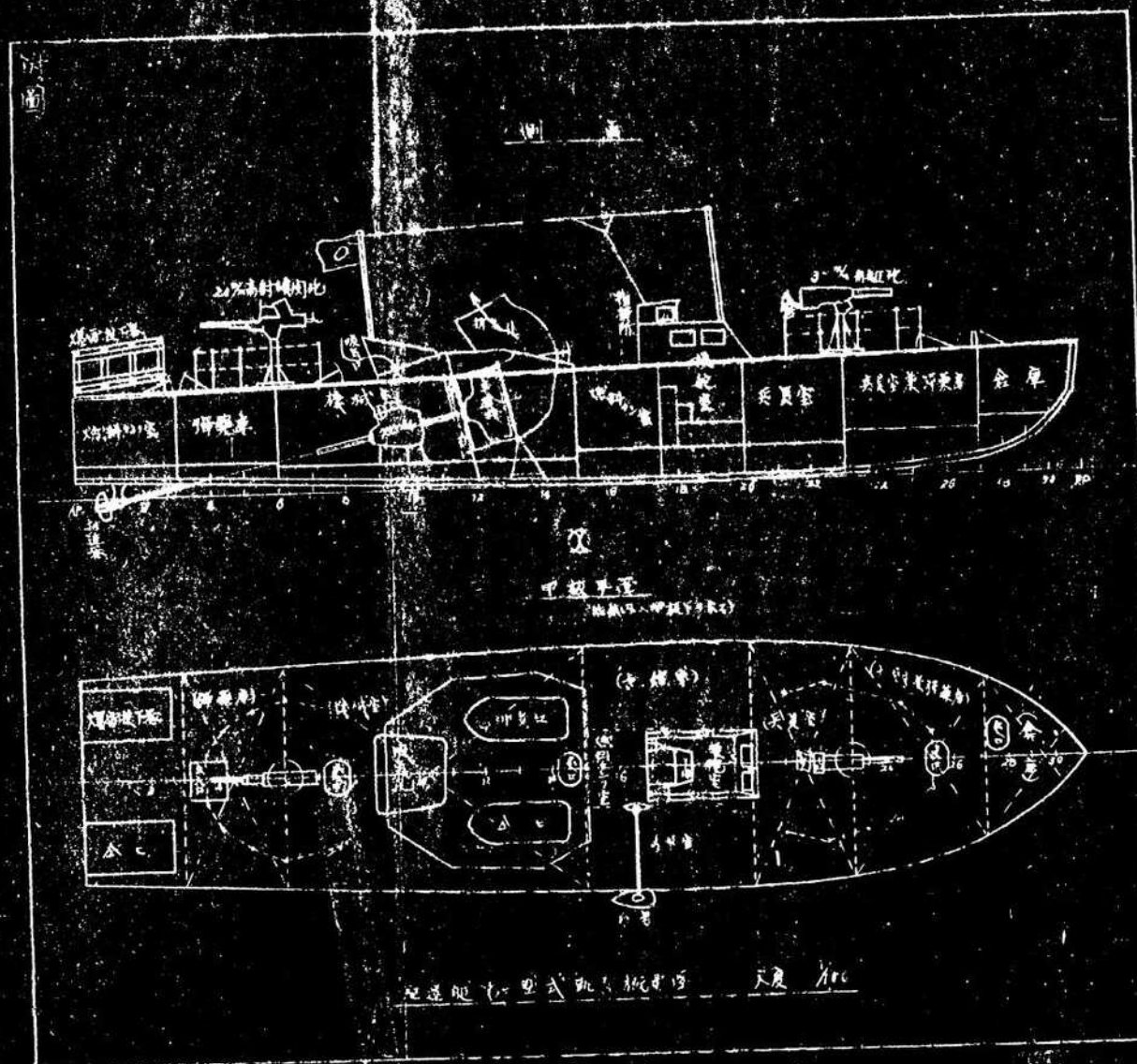
陸軍技術中尉 西 川 正 喜

配布先

兵政本(二三)一研(一)二研(一)三研(一)四研(一)五研(一)

裏面白紙

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



裏面白紙

2

軍事極秘

通則第七十一條
用 濟後燒却
十技研研報第二號(○冊5)

整理
番號

34

部ノ内

1號

昭和十九年九月四日
第十陸軍技術研究所

高速搬送機第一型式研究報告

裏面白紙

高速輸送艇第一型式研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十八年十月一日附兵政技機密第三〇號訓令ニ依リ高速輸送艇第一型式ノ研究ヲ開始ス

第二 研究成果ニ對スル判決

高速輸送艇第一型式ハ構造機能共ニ概ネ良好ニシテ現臺備艇ニ比シ性能ヲ向上シアルモノト認ムルヲ以テ爲シ得ル限り本艇ノ研究成果ヲ活用スルニ努ムルヲ要ス

第三 研究經過ノ概略

一 研究開始

昭和十八年十月一日海運資材ノ移管ニ際シ陸軍運輸部ニ於テ担任シアリタル本艇ノ研究ヲ繼承ス、繼承時ニ於ケル本艇ノ研究ハ試作第一艇ノ試験結果ニ基キ試作第二艇ヲ設計起工セル直後ノ状態ニ在リ

二 試作

1 試作工場

横濱ヨット工作所

2 試作經過

- (1) 昭和十八年九月二十日本艇ノ試作ニ着手ス
- (2) 昭和十九年一月船舶司令部食ノ他ノ要望ニ基キ試作艇ニ左ノ改修ヲ實施ス
- イ 双聯機關砲(三基)ノ整備及之ニ伴フ船体構造ノ變更
- ロ 爆雷投下器ノ設置
- ハ 號装置ノ整備
- ニ 指揮連絡設備ノ完備
- ホ 諸室配置ノ改造及新設
- ヘ 小波泛水装置ノ廢止、及折疊舟搭載設備ノ新設
- ト 荷役装置ノ改良
- チ 通風装置ノ改良
- リ 木製燃料「タンク」ノ使用
- (3) 昭和十九年三月二十四日機關室ニ火災ヲ發生シタルヲ以テ更ニ左ノ改修ヲ實施ス
- イ 機關室ノ一部改修
- ロ 鋼製燃料「タンク」ノ搭載(木製ノモノヲ廢止ス)
- (4) 昭和十九年五月十五日本艇ノ試作ヲ完成ス

試驗

1 自昭和十九年五月十六日開始神奈川縣油壺及靜岡縣下田附近ニ於テ航走試驗、射擊試驗、同 年五月二十二日 無線機試驗、ト機試驗及荷役試驗ヲ實施ス其ノ結果各部ノ機能頗ル良好ニシテ實用ニ供シ得ルモ細部ニ於テ一部改修ヲ要スル點アルヲ認ム

2 昭和十九年六月十二日所製ノ改修ヲ完了シ鶴見沖ニ於テ更ニ速力試驗及旋回力試驗等ヲ實施ス

其ノ結果ハ常備狀態ニ於テ速力二〇、六節ヲ得タルニ過ギザリシモ推進器ノ改修ニ依リ十分計速速力(二三節)ニ達シ得ルモノト認メタリ(速力試驗ノ成績附表ノ如シ)時偶本艇裝備機關ノ大部ヲ空冷機關ニ轉移セラル、コト、ナレルヲ以テ爾後ノ研究ヲ打切り推進器ノ改修圖面ヲ作製シテ昭和十九年八月研究ヲ終了ス

第四 高速輸送艇第一型式概説

一 目的用途

敵航空勢力圍内ニ於ケル高速掃給用掃艇トシテ使用ス

二 構造機能ノ大要

木製高速艇ニシテ附圖ノ如キ一級配置ヲ有ス

(一) 船体部

1 船型

V底ヲ有スル半排水型ニシテ稜角部ニ水密シヲ有ス (現制ノモノニ同ジ)

2 船体構造

イ 龍骨ハ機上上下ニ材合セトシ其ノ上ニ徑荷ノ肋骨ヲ配置ス、肋骨ノ心距ハ一級

ニ之ヲ六〇〇センチトスルモ機室底部ニ中間肋骨ヲ増設ス

ロ 底外板及側外板ハ極薄「ベニア」板 (尿素系合成樹脂製積層板ヲ使用ス) トシ其ノ

厚サハ底外板ニ於テ二〇センチ (一〇センチ四枚合セ) 側外板ニ於テ二〇

センチ (二〇センチ二枚合セ) トス

ハ 甲板ハ厚サ一〇センチ極薄「ベニア」板及厚サ二〇乃至三〇センチノ杉又ハ松板トス

3 船艙及荷役装置

船艙容積ハ之ヲ約五立方メートルシ荷役用トシテ一屯「デリック」及手動揚貨機ヲ設

諸室配置

甲板上ニ操舵室（所長ノ指揮連絡設備ヲ有スル指揮所ヲ備フ）ヲ甲板下ニ艙倉庫、兵員室、艇長室、無線室、ト號室、機務室、燃料油槽室及彈藥爆雷庫ヲ配置ス

6 舵 一個トシ之ヲ中央軸上推進ノ後方ニ裝備ス

6 其ノ他

所長ノ曳航繋留装置、橋、機関砲用防波板手摺等ヲ設備ス

(二) 機 關 部

1 主機關

主機關ハ航空水冷發動機三基トシ其ノ同方向ハ船ヨリ見て左廻リトス

2 軸系裝置

軸系裝置ハ逆轉機「クラツター」制動機、主軸、船尾等ノ各部ヨリ成ル

逆轉機ハ中央機ニ「クラツター」ハ左右兩舷機ニ連結シ共ニ其ノ動力ヲ主軸ニ傳遞ス

主軸ハ其ノ一端ヲ逆轉機又ハ「クラツター」ニ連結シ船尾管ヲ經テ艇外下面ニ吐出シ

端末ニ一個ハ推進機裝置ス

3 推進器

三枚貨ノモノ三個ヲ裝備ス

4 唧筒類

艇内ニ左ノ唧筒類ヲ設備ス

燃料移動用手動「ポンプ」

滑油

清水

海水呼水用

汚水ポンプ

5 油槽類

艇内ニ左ノ油槽類ヲ設備ス

燃料貯蔵「タンク」

「集合」

滑油貯蔵

「循環」

清水貯蔵

膨脹
その他

所要部位ニ滑油冷却器、清水冷却器、諸計器、諸管、濾器、辨及「コック」類ヲ設備ス

(三) 電氣部

1 電源

照明、通風及連絡用電源トシテ機銃室内ニ二四V一八〇AH蓄電池ヲ又無線及ラ號用電源トシテ兩室内ニ二四V一〇〇AH蓄電池ヲ設備ス

其ノ充電ハ左舷機ヨリ「ベルト」ニヨリ傳導スル二四V一KWノ直流發電機一基ニ依リ之ヲ行フ

2 電氣機器

二四V五〇〇W電動通風機二基、照明裝置、及速力通信器等ヲ主トス

(四) 兵裝

1 高射機關砲

操舵室前方、中央部、艏部ニ各一門ヲ裝備ス

(2) 多爆雷投下器

艏部兩舷ニ各一基ヲ裝備ス

無線機

無線室ニ之ヲ裝備ス

4. 聴装置

右舷々側ニ送受波器ヲ、操舵室後部ニ其ノ架線縱装口及配線器ヲ、聴室ニ其ノ他ノ計器類ヲ設備ス

主要諸元

全長 三三米〇〇〇

最大幅 五米〇〇〇

深 二米八〇〇

排水量 排水量 平均吃水

輕荷狀態 三、〇〇〇 〇.七二〇

常備狀態 八〇、〇〇〇 一、一二三

滿載狀態	九七、〇〇〇
力	一、二六〇
常備狀態	最大約二〇、六節（計量最大二三節）
航續距離	約一〇〇〇浬
燃料搭載量	二〇 屯
貨物搭載量	四〇 屯
主機關	
型式	九八式八〇〇馬力統制水冷發動機
數量	三 基
最大軸馬力	八〇〇馬力（一基當リ）
回轉數	
最大	二〇〇〇回轉／毎分
常用	一六〇〇 "
最低	八〇〇 "

推進器

敷置

三

直経

六五〇(現制ノモノハ七〇〇(糸トス))

比

〇、八一五

兵装

四式基筒双聯二〇口径高射機關砲

三基

爆雷投下器

八八〇(一基)

り號裝置

一式

船艇無線機甲

一式

第五機(秘)密兵器ノ取扱區分

軍機秘

第六研究担任者

科長

陸軍中佐

内

鐵

男

主任者

陸軍技術少佐

佐

雅

夫

陸軍技術大尉

佐

藤

茂

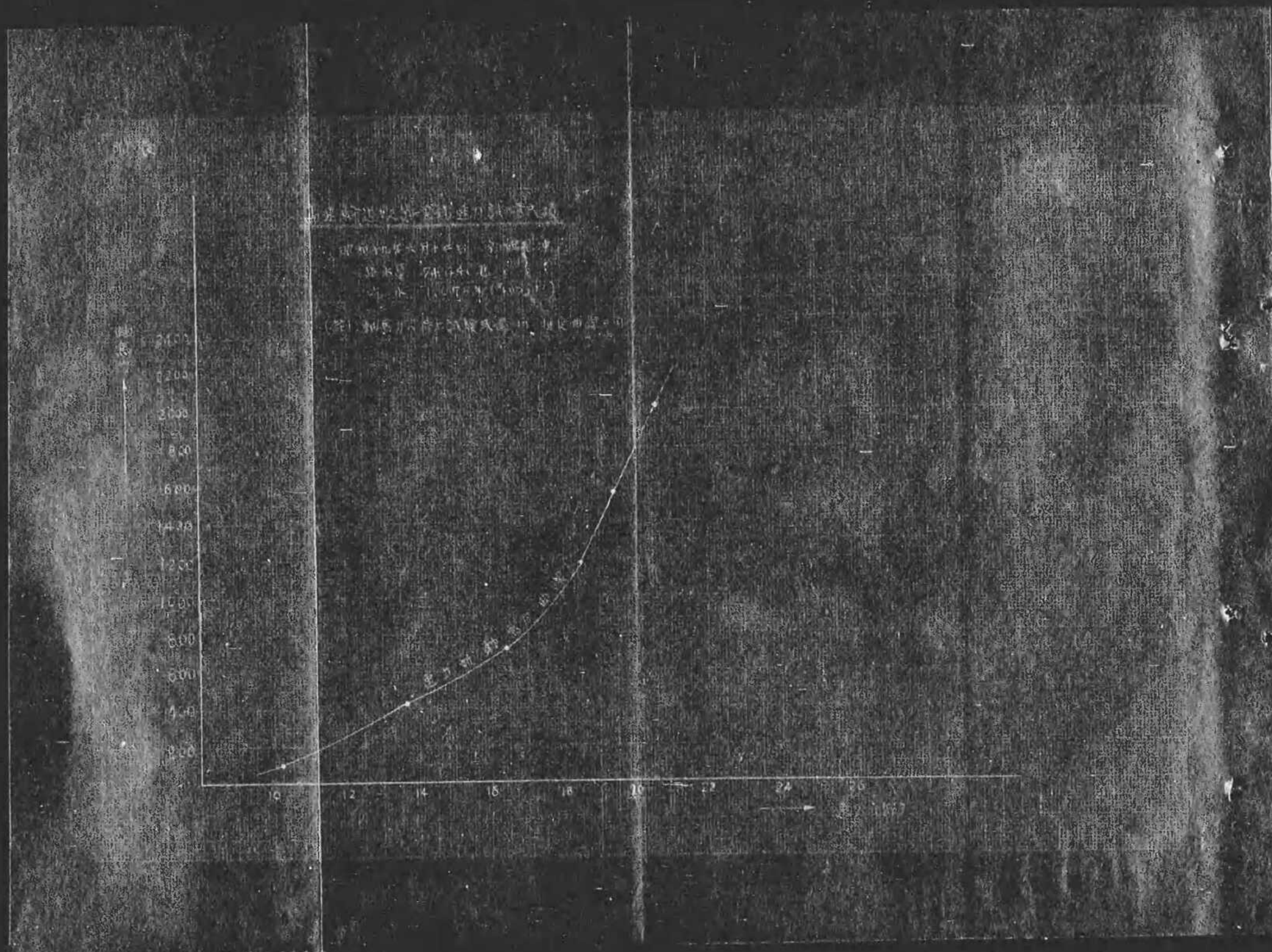
陸軍技術中尉
陸軍技術中尉
田茂良
川正喜

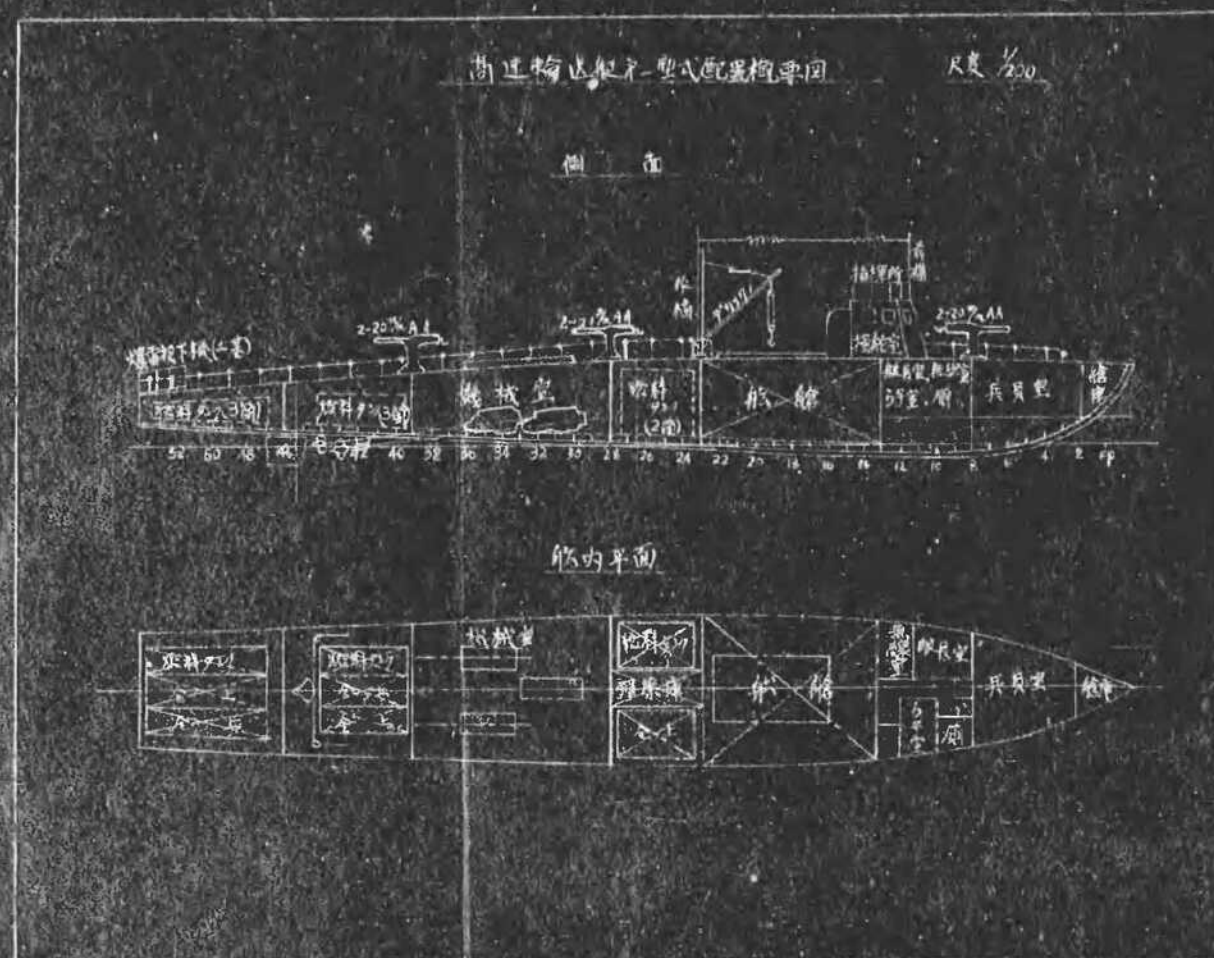
陸軍先
兵隊本(三) 一研(二) 二研(二)
三研(二) 四研(二) 五研(二)

裏面白紙



裏面白紙





裏面白紙

3

軍事秘密

十技研研報第三編 (◎第5)

規則第七十一條
適用濟使燒却

昭和十九年十月十三日
第十陸軍技術研究所

秘匿及欺騙方式研究中間報告
(舟艇用偽裝網ニ關スル研究)

裏面白紙

秘匿及欺騙方式研究中間報告

(舟艇用偽裝網ニ關スル研究)

第一 研究ノ起因

昭和十九年六月八日附兵政技機密第一三號訓令ニ據ル秘匿及欺騙方式ノ一部トシテ舟艇用偽裝網ノ研究ヲ開始ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

舟艇用偽裝網ハ空中及水上ヨリスル視察ニ對シ偽裝効果顯著ニシテ實用ニ適スルモノト認ム

二 將來ノ處置

遠ニ兵器構造要領及兵器仕様書ヲ作製シ其ノ整備ヲ可能ニス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

昭和十九年六月末舟艇用偽裝網ノ構造及色彩等ニ關シ研究ヲ開始ス

二 設計

昭和十九年七月上旬設計ヲ完了ス

試 作

1 試作工場 日本漁網船具株式會社下關工場

2 試作經過 昭和十九年七月中旬試作ニ着手シ同年八月上旬之ヲ完了ス

試 驗

1 自昭和十九年八月二十二日至昭和十九年八月二十四日間兵庫縣揖保郡室津町附近海上ニ於テ舟艇用偽裝網ニ依ル連絡燈ノ秘匿試驗ヲ實施ス、其ノ結果本偽裝網ハ取扱容易ニシテ水平方向ノ觀察ニ對スル偽裝効果顯著ナルヲ認ム

2 自昭和十九年九月五日至昭和十九年九月七日間陸軍船舶練習部ニ於テ本偽裝網ノ實用試驗ヲ實施ス

其ノ結果本偽裝網ハ空中及水上ノ觀察ニ對スル偽裝効果顯著ニシテ高度及距離五〇〇米以上ヨリ目視ニ依リ其ノ所在ヲ發見シ得サルヲ認ム

本試驗ノ實施要領及結果ノ概要別冊「舟艇秘匿試驗實施要領及秘匿寫眞」ノ如シ
又、本偽裝網ニ關スル修

改點及修補本條及附屬具ニ所要ノ改修ヲ行ヒ昭和十九年九月末其ノ研究ヲ終了ス
第四 舟艇用偽裝網概説

一 目的用途

舟艇用偽装網ハ敵ノ空中及水上ヨリスル視察ニ對シ主トシテ海陸接敵部ニ於ケル舟艇ヲ秘匿スルニ使用ス

二 構造機能ノ大要

舟艇用偽装網ハ網地ニ所望色彩ノ偽裝布ヲ縫着シタル布片(附圖第一)ニシテ其ノ所要箇ヲ結着シ直接又ハ骨組上ニ之ヲ展張シテ舟艇ヲ覆蔽スルモノトス、偽裝布着脱ノ要領附圖第二ノ如シ

三 主要諸元

- 1 網地一枚ノ大サ 八・〇米平方
- 2 偽裝布ノ大サ 幅〇・三米 長サ八・五米
- 3 一枚ノ重量 約一〇斤(但シ乾燥状態トス)

第五機(秘)密兵器取扱區分

普通

第六研究擔任者

科 長 陸軍中佐 内 山 鐵 男

主任者

國軍技術中尉

村

山

友

弘

配布先

兵隊本(二三)

三研(一)

船司(二)

船廠(二)

船線(二)

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

主務部

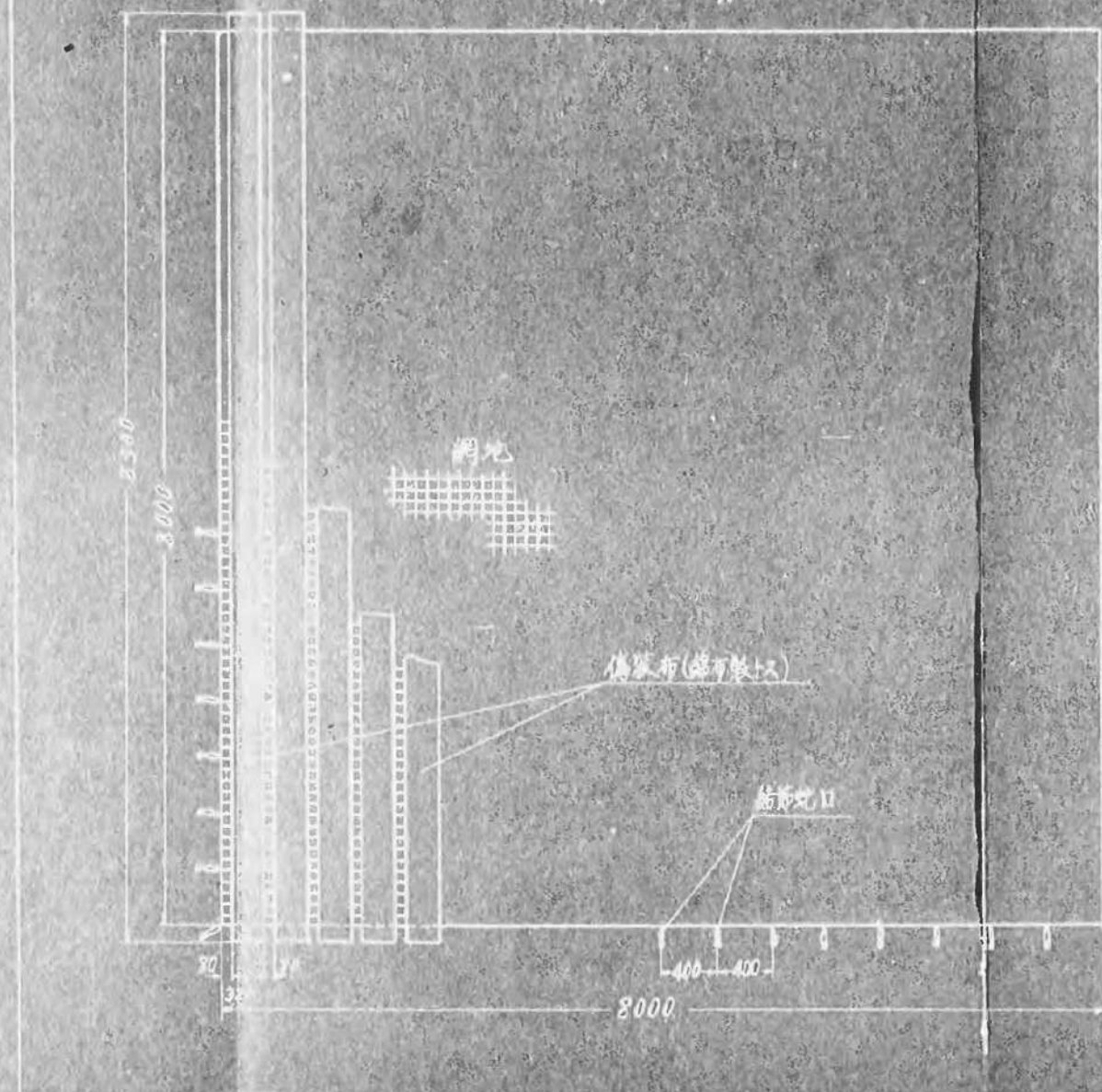
主務部

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

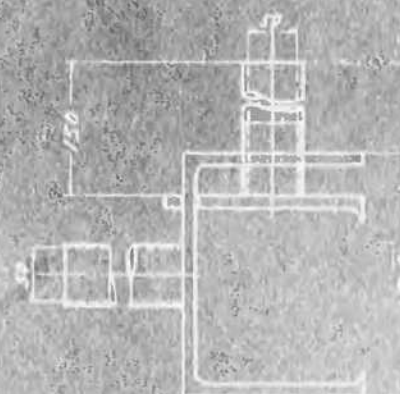
附圖第一

舟艇用偽装網 (本体及同属品)

本 体



属 品
防鉄材取付金具



説明

1. 網地ハ波ビヤシ流シテトス
2. 偽装布ハ色彩ハ最良ニ彩色
灰色及土色ノ四種トシ現地
状況ニ適合スルモノヲ採用ス
3. 防鉄材取付金具ハ骨組トシテ
竹又ハ木ヲ舟艇側ニ取付
クル場合ニ使用スルモノトス

裏面白紙

附圖第二偽裝布着脱髮領

(一) 偽装布(青色)



(二) 縫着ケ



(三) 縫着ケ完了(中間部)



(四) 縫着ケ完了(隅部)



(五) 撤 収



(六) 縫着ケ用竹串



軍事秘密

規則第七十一條
適用 済後焼却

十校研研報第三號別冊

昭和十九年十月十三日
第十回軍技研研究所

舟艇秘匿試験實施要領及秘匿寫眞

寫眞説明

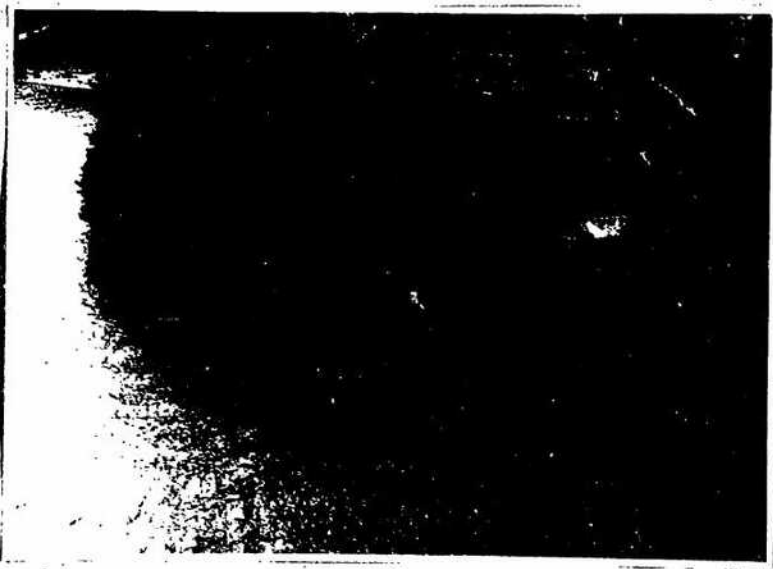
- 一 寫眞ニ附シタル番號ハ長圖ニ示セル舟艇秘匿ノ位置ヲ示ス
- 二 寫眞中點線ヲ以テ圍ミタル部分ハ舟艇用偽裝網ノ位置ヲ示ス

裏面白紙

① 距離 300 米



① 高度 1.50 米



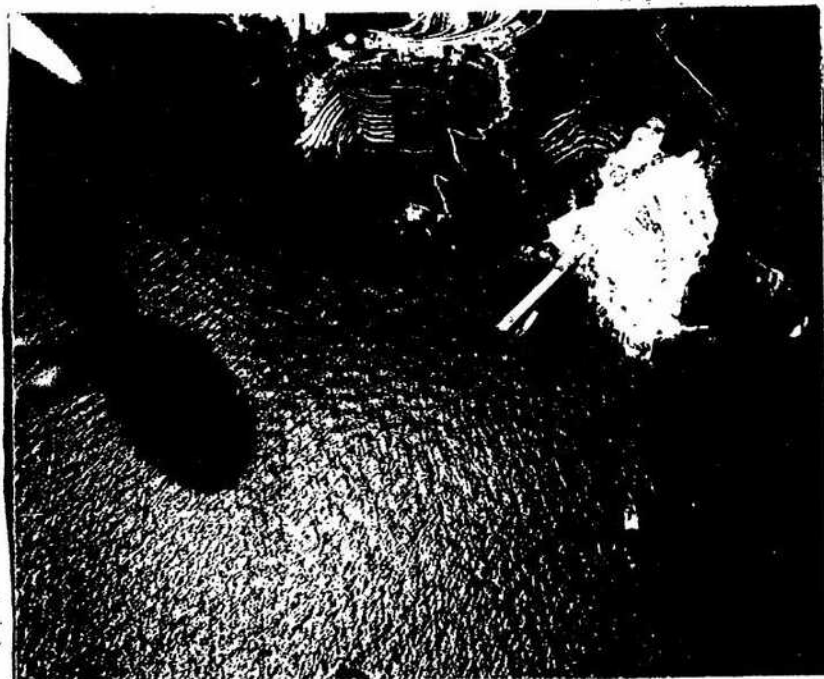
① 距離 30 米



① 距離 200 米



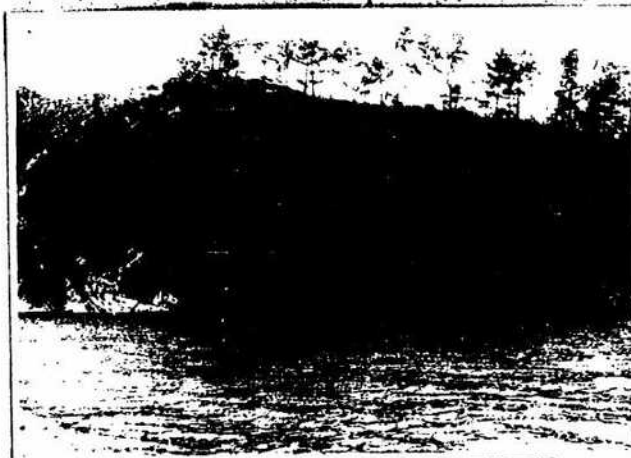
④ 高度 300 米



裏面白紙

裏面白紙

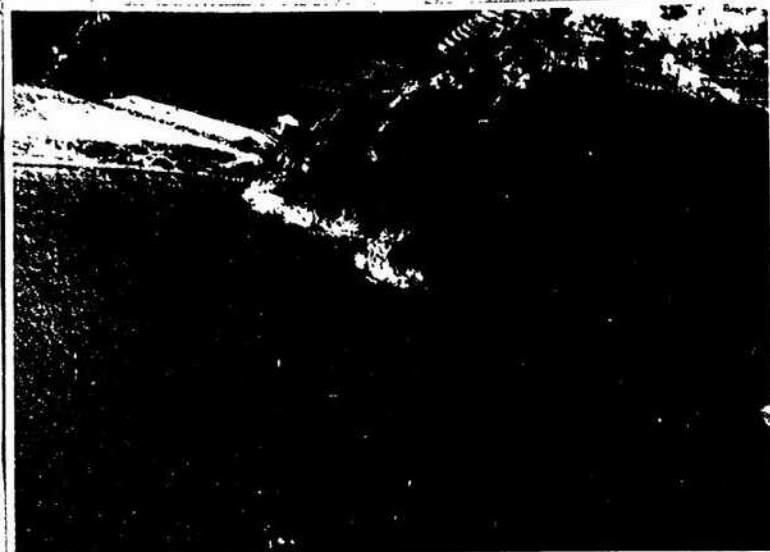
② 距離 30 米



② 距離 100 米



② 高度 150 米



② 高度 300 米



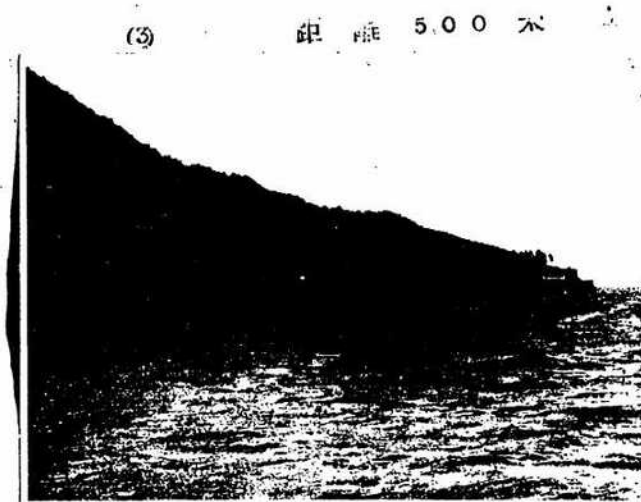
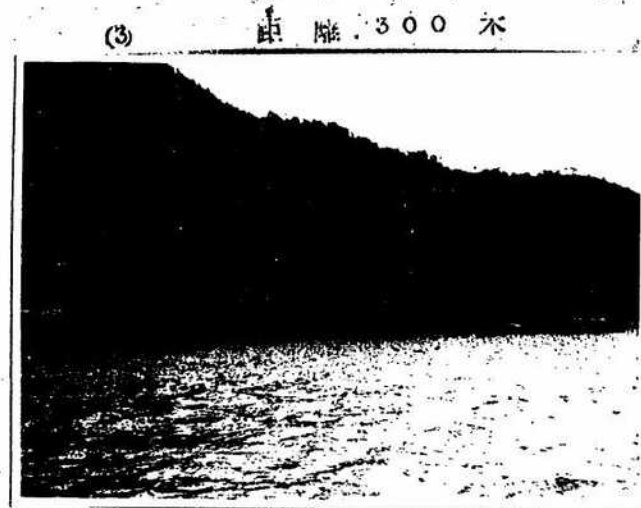
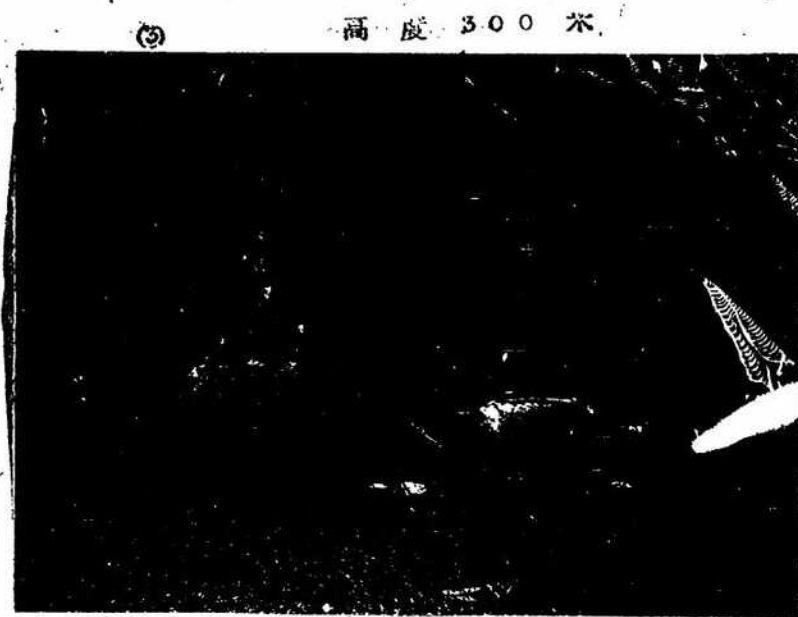
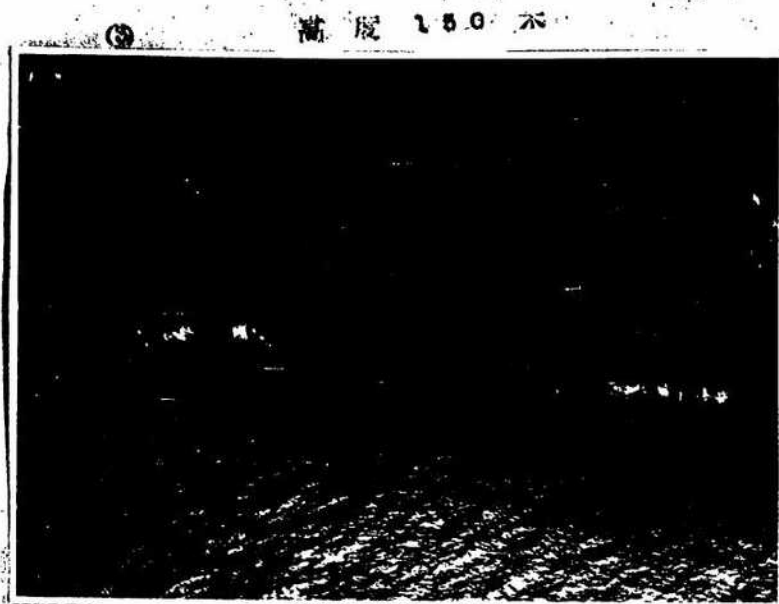
裏面白紙

② 距離 50 米



③ 距離 100 米

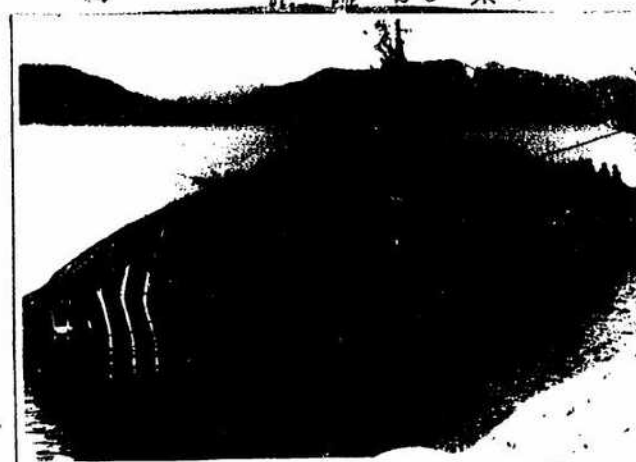




(4) 距離 200 米



(4) 距離 20 米



(4) 距離 800 米



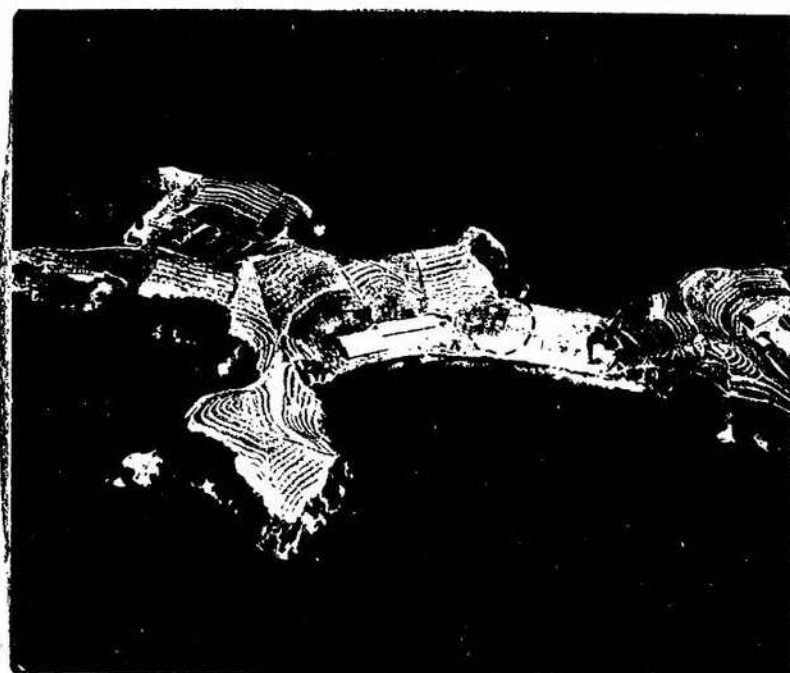
(4) 距離 100 米



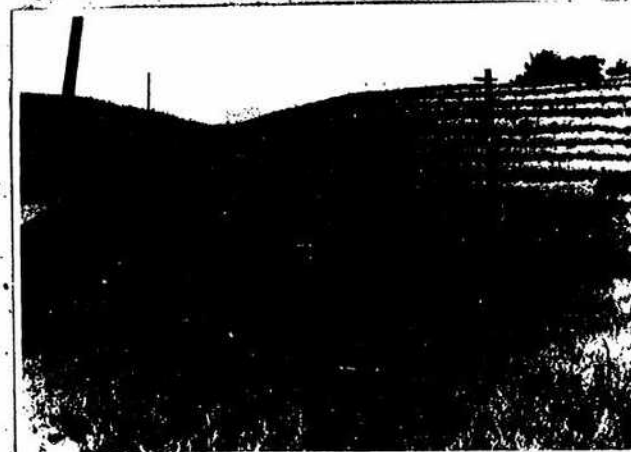
(5) 高度 160 米



(5) 高度 300 米



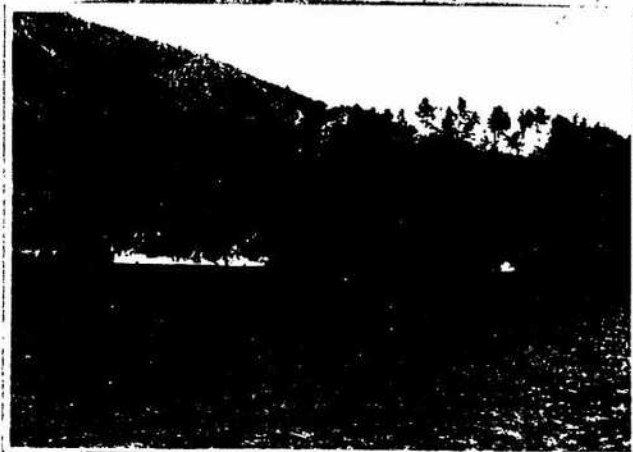
(5) 距離 50 米



(5) 距離 300 米



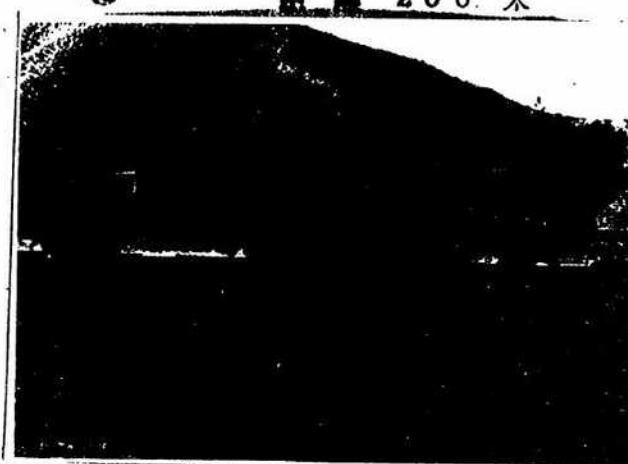
干潮時
距離 150 米



左 (6)
右 (7) 距離 500 米



干潮時
距離 200 米



距離 250 米

干潮時
距離 250 米



裏面白紙

(6)

干潮時
距離 250 米



(7)

干潮時
距離 200 米



左右

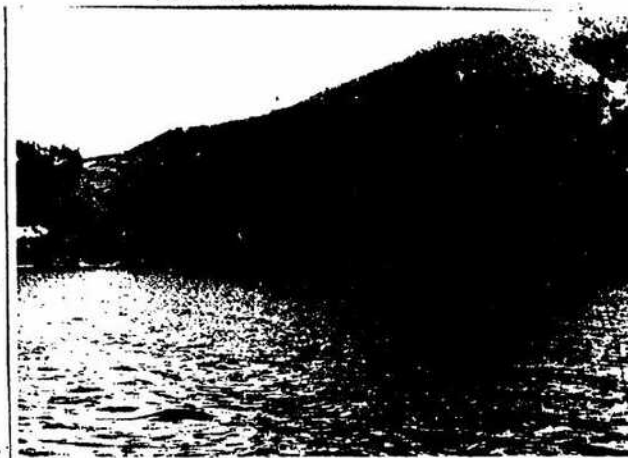
(6)
(7)

干潮時
高度 500 米



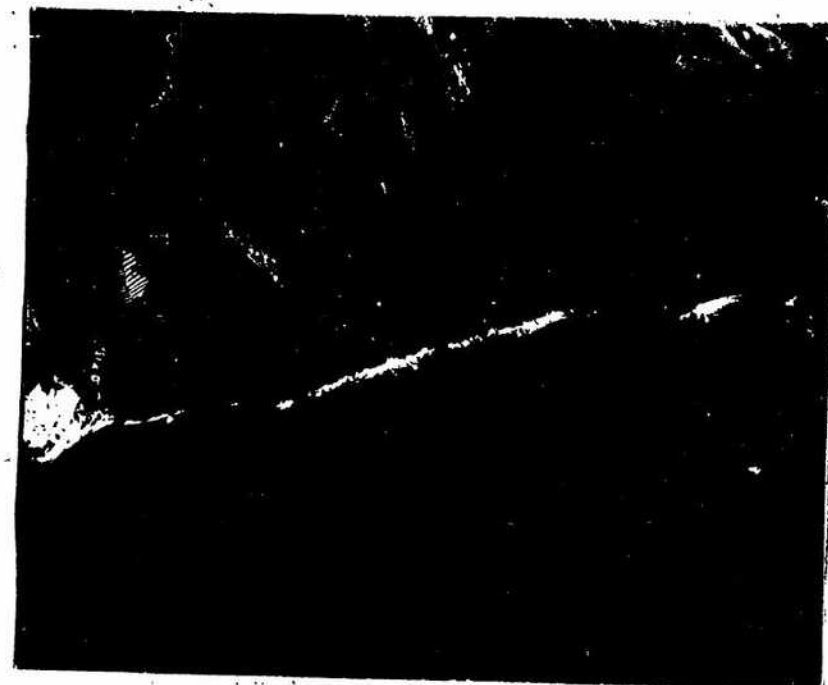
(6)

干潮時
距離 200 米



左 ⑨
石 ⑨

干 潮 時
高 度 500 米



4

軍事極秘

規則第七十一條
適用

用済後焼却
整理

37
部ノ内
一號

十校研研報第四號 (◎舟2)

昭和十九年十月十四日
第十陸軍技術研究所

連絡艇研究中間報告

裏面白紙

連絡艇研究中間報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年六月十日附兵政技機密第一三號訓令ニ據リ水上ヨリ高速ヲ利用シ敵艦船ノ舷側ニ肉迫シ爆雷ニ依ル攻撃ヲ實施シ得ル小型舟艇ニ就キ研究ヲ開始シ昭和十九年七月二十二日附兵政技機密第一六號訓令ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

- 1 連絡艇甲一型ハ概ネ所期ノ性能ヲ具備シ實用ニ適スルモノト認ム
- 2 連絡艇運搬具甲及乙ハ所要ノ要件ヲ具備シ實用ニ適スルモノト認ム

二 將來ノ處置

- 1 連絡艇甲一型ノ兵器用圖書ヲ整備ス
- 2 連絡艇運搬具甲及乙ヲ連絡艇甲一型關聯器材トシテ其ノ兵器用圖書ヲ整備ス
- 3 折疊式連絡艇ノ設計圖ヲ完備ス
- 4 魚雷ノ研究進捗ニ伴ヒ簡易魚雷裝備連絡艇ノ研究ヲ續行ス
- 5 別途ニ超高速等更ニ性能ヲ向上セル連絡艇ノ研究ヲ實施ス

第三 研究經過ノ概要

- 一 昭和十九年六月中旬研究ヲ開始ス
- 二 同年六月下旬甲一型ノ設計ヲ概成シ其ノ試作ヲ開始ス
- 三 同年七月十日甲一型ノ試作ヲ完了シ竣工試験ノ結果平水ニ於テ所期ノ性能ヲ具備シアルヲ確認ス
- 四 同年七月十八日爆藥前裝式タル甲三型、甲一型ヲ改良セル甲四型及更ニ小型ナル甲六型ノ試作ヲ開始シ七月二十五日之ヲ完了ス
- 五 自同年六月下旬至同年七月下旬間甲一型整備ノ爲陸軍造兵廠及製作工場ニ對シ所要ノ技術指導ヲ實施ス
- 六 自同年七月二十三日至同年七月三十日間千葉縣岩井海岸ニ於テ前記各試作艇ノ實用試験ヲ實施シ左ノ判決ヲ得タリ
 - 1 連絡艇甲一型及甲四型ハ構造機能概ネ良好ニシテ實用ニ供シ得ルモノト認ムルヲ以テ之ヲ若干ノ修正ヲ加ヘ速カニ其ノ整備ヲ實施スルヲ要ス
 - 2 連絡艇甲三型ハ資材準備ノ關係上本試験ニ於テ其ノ極限性能ヲ確認シ得ス、又前方衝重裝載ヲ要求セラレアル關係上甲一型ノ實績ヨリ之ヲ推斷シ得サルモノアルヲ以テ速カニ試

敵ヲ再行シ其ノ性能ヲ明カナラシムルヲ要ス

同年七月二十九日前項試験地ニ於テ甲一型、甲三型、甲四型、及野戰船艀本廠製ノモノ並ニ海軍四艇ノ比較試験陸軍兵器行政本部主催ノヲ實施ス、其ノ結果爾后ノ整備及研究方針ヲ左ノ如ク決定セラル

1 連絡艇ノ整備ハ取敢ヘス之ヲ甲三型ニ轉換シ且其ノ運搬具ヲ研究ノ上併用ス
2 甲三型ト同一型式ニシテ更ニ小型輕量ナルモノニ就キ研究ヲ促進ス
ハ 同年八月九日附兵政技審第一四一三號通牒ニ據リ連絡艇ノ試作研究ニ關シ左記事項ヲ實施ヲ示達セラル

1 甲三型ニ類スル型式ニシテ更ニ輕量、高速ナルモノノ研究試作
2 秘匿、掩護法ノ研究
3 簡易運搬具及運搬法ノ研究
4 現整備艇ニ夜間方向維持裝置、防彈裝置、排水ポンプ裝置ノ研究
5 各種再生機關ヲ裝備セル艇ノ性能試験
六 前項示達ニ基キ所製ノ研究ヲ實施ス、其ノ狀況左ノ如シ

1 甲三型ニ類スル輕量、高速ナルモノトシテ甲七型及甲八型ヲ計畫シ、前者ノ試作ヲ帝國

造船株式會社ニ命シ後者ノ設計ヲ所内ニ於テ實施ス

2 秘匿、掩護法トシテ洞窟ノ利用、偽裝網ノ使用、水中格納等ニ就キ検討ス、洞窟ニ關シテハ艇トシテノ研究事項ナク、偽裝網ニ關シテハ「秘匿欺騙方式」ノ研究ニ依リ又水中格納ニ關シテハ成算ノ見込ナキヲ以テ共ニ爾后ノ研究ヲ實施セス

3 簡易運搬具及運搬法トシテころ及車輪ヲ用フルモノ三案ヲ計畫シ其ノ試作ニ着手ス

4 夜間方向維持裝置トシテ舟艇羅針盤ノ利用、艇尾燈及艇尾信號燈ノ使用ニ就キ研究シ其ノ一部ヲ試作ス

5 防彈裝置ノ裝備ハ艇ノ輕量、高速ナル特質ト相背馳スルモノアルヲ以テ其ノ研究ヲ中止ス

6 排水「ポンプ」ノ裝備ハ合致製艇体ニ於テ其ノ要度比較的少キト艇ノ整備ヲ容易ナラシムル見地トニ依リ之ヲ行ハス自動排水裝置ヲ採用スルニ決ス

7 再生機關ハ先ツ「フオード」及「シボレー」ニ就キ機關ノ改造法及機裝法ノ研究ニ着手ス

12 同年八月十八日甲三型ノ整備用圖面ヲ概成セルヲ以テ關係陸軍造兵廠等ニ所屬ノ説明ヲ行ヒ製造上ノ見地ヨリスル檢討ヲ實施ス

一 自同年八月十九日至八月二十三日間兵庫縣室津海岸ニ於テ甲三型ノ第二回試験ヲ實施シ
左ノ判決ヲ得タリ

連絡艇試作甲三型ハ構造機能概ネ適當ニシテ二五〇呎以下ノ荷重ヲ積載シ所期ノ性能ヲ
發揮シ得ルヲ以テ實用ニ適スルモノト認ム

尙本試験ニ於テ夜間方向維持裝置トシテ艇尾信標燈ヲ試験シ其ノ成績良好ナルコトヲ確
認ス

一 同年八月二十五日甲三型ノ整備用圖面ヲ完成ス

一 同年八月二十八日甲三型ニ於テ實施シタル實爆試験ノ結果ニ基キ爾后ノ整備及研究方針ヲ

左ノ如ク更改セラル

1 今後ノ整備ハ甲一型ニ依ル

2 爆藥前裝式ヲ廢シ爆雷型式ニ依ル、爆雷ハ當分ノ間一二〇呎ニ限ルモノヲ採用ス

3 連絡艇ノ整備ハ現計畫ヲ以テ中止スルモノトシ爾后ノ研究ハ之ヲ敵ノ對策ヲ排除シテ
行フモノ及他ノ敵ノ意表ニ出ツルモノニ變更ス

4 將來ノ爲メ二〇〇呎、三〇〇呎及四〇〇呎爆雷ニ就キ研究ス

一 自同年九月五日至九月十日間兵庫縣室津海岸ニ於テ連絡艇甲型一二五〇呎（一二〇呎）

筒縛着)三〇〇疋及四〇〇疋爆雷ヲ搭載シ速力二〇節以上ヲ確保スルニ必要ナル同艇ノ改修條件ヲ探究シ併セテ爆雷搭下装置ノ機能ヲ檢シ(第三回試驗)左ノ判決ヲ得タリ

1 連絡艇ハ

イ 研磨良好ナル徑三〇〇耗、「ピッチ」三四五耗ノ推進器ヲ使用スルコト

ロ 爆雷ヲ操ヨリ六八一〇種ノ位置ニ搭載スルコト

ニ依リ舟体ニ大ナル改修ヲ行フコトナク爆雷二五〇疋ヲ積載シ速力二〇節以上ヲ確保シ得ヘシ

2 鋼索式後部爆雷投下装置ハ手動及衝突共ニ作動確實投下位置良好ニシテ實用ニ供シ得ルモノト認ム

尙本試驗ニ於テ搭乗者背負式艇尾信號燈ヲ試驗シ其ノ實用ニ適スルヲ確認ス

一 同年八月二十五日連絡艇甲型用運搬具ノ試作ヲ完了シ自九月一日至同月四日間室津海岸

ニ於テ其ノ試驗ヲ實施シタルモ新タニ自動車前車輪車軸ノ使用ヲ要求セラレタルト更ニ各部ノ構造ヲ簡易ナラシメ得ル余地アルトニ依リ試作ヲ再行シ自九月十一日至九月十二日間同地ニ改メテ船舶司令部ト協同試驗ヲ實施シ左ノ判決ヲ得タリ

試製連絡艇用運搬車中、連絡艇運搬具甲及乙ハ構造簡單、機能良好且取扱容易ニシテ實用價值十分ナルモノト認ム

依テ運搬具甲、乙共ニ整備ノ要アリト認メ圖面ヲ陸軍兵器行政本部ニ送付シテ運搬具ノ研究ヲ終了ス

一六、折疊式連絡艇ハ昭和十九年八月中旬設計ニ着手シ九月末之レヲ概成シタルモ兵政技密第一五九九號通牒ニ據リ爾后ノ試作ヲ中止シ設計終了ヲ以テ一應其ノ研究ヲ終了ス

一七、甲一型ハ第三回試験ノ結果ニ鑑ミ投下器ノ改修、其他圖面ノ補備修正ヲ行ヒ自昭和十九年九月二十二日至同月二十五日間整備關係方面ニ其ノ説明ヲ實施シテ研究ヲ終了ス

一八、「フオード」「シボレー」等再生機關ノ使用ニ關シテハ整備ニ關聯シテ所要ノ技術指導ヲ行ヒ昭和十九年十月上旬一應之レヲ終了ス

一九、以上ニ依リ連絡艇甲一型ノ研究ヲ終了ス

第四 連絡艇甲一型概説

一、目的用途

水上ヨリ高速ヲ利用シ敵輸送船ノ舷側ニ肉迫シ爆雷ニ依ル攻撃ヲ實施ス

二、構造機能ノ大要（附圖第一）

連絡艇甲一型ハ艇及運搬具ヨリ成ル

艇ハ船体部、機關部、投下裝置、屬品及予備品ヨリ成ル

イ 船体部ハ船殼、張出軸受、操舵裝置、曳航繫船裝置、及甲板鐵裝ヨリ成ル

船殼ハ龍骨、稜角材、縱通材等ニ樑ヲ、肋骨等ニ桁材ヲ甲板、外板等ニ耐水性合板又ハ杉板ノ三重張ヲ使用セル木製輕構造ニシテ其ノ船型ヲ▽底半滑走型トス

張出軸受、操舵裝置、曳航繫船裝置、甲板鐵裝ハ孰レモ簡易、輕量ニシテ操舵裝置ニ直進性能良好ナル舵ヲ用ヒ且簡單ナル舵固定裝置ヲ附ス

ロ 機關部ハ主機械、發煙裝置、冷却水管裝置、排氣裝置、軸系裝置、燃料裝置、操縱裝置及其他ヨリ成ル

主機械ハ「ニッサン」又ハ「トヨダ」自動車用ガソリン機關及各種回收機關（主トシテ「ブオード」「シボレー」「プリムス」ヲ轉用シ之ニ變速機ノ除去、油溜ノ冷却等ノ改修ヲ行ヒタルモノトス

發煙裝置ハ「クラッチ」及「クラッチレバー」（又ハ「クラッチペダル」）ヨリ成リ自動車用機關ノモノノ一部ヲ改造シテ之ヲ利用ス

冷却水管裝置ハ自動車用機關本來ノ冷却水「ポンプ」ニ海水弁及所要ノ配管ヲ附加シ船底ヨリ海水ヲ吸上ゲ之ヲ機關内部ニ循環セシメテ排氣管中ニ噴射セシムルモノトス

排氣裝置ハ簡單ナル管トス

軸系裝置ハ「クラッチ」軸、自在接手、推力軸受、推進軸及船尾管ヨリ成ル、自在接手ハ自動車用ノモノヲ利用ス

燃料裝置ハ燃料槽及配管ヨリ成ル

操縦裝置ハ水温計、油壓計等ノ計器及瓦斯加減柄等ヨリ成ル、諸計器ハ自動車用ノモノヲ利用ス

ハ 投下裝置ハ投下臺、離脱裝置、擊突裝置、船側槓桿及誘導索ヨリ成リ一二〇瓩爆雷二個ヲ長手方向ニ縛着セルモノヲ手動又ハ衝突ニ依リ投下シ得ルモノトス（附圖第一）

ニ 製品及予備品附表第一ノ如シ

三 運搬具甲及乙

運搬具甲及乙ハ連絡艇甲一型ヲ海岸ニ於ケル秘匿位置ヨリ迅速ニ泛水シ或ハ陸上若干距離ヲ移動セシムルニ使用スルモノニシテ乙ヲ各艇毎ニ一種若キ艇毎ニ裝備セラルモノトス
イ 運搬具甲ハ自動車用車輪及車輪ヲ簡易ニ取付ケ得ル木製架ニシテ其ノ構造附圖第二ノ如ク、其ノ主要諸元左ノ如シ

長

四・〇〇〇米

幅 一・四五〇米
 高 〇・四九〇米
 主桁寸法 七〇耗×一二〇耗
 重 量 約一三〇疋
 運搬所要人員、一三人（連絡艇ヲ搭載セル場合）
 運搬具乙ハ木製ニシテ其ノ構造附圖第三ノ如ク其ノ主要諸元左
 ノ如シ

長 四・〇〇〇米
 幅 一・四五〇米
 高 〇・四六〇米
 主桁寸法 九〇耗×九〇耗
 重 量 約六〇疋

運搬所要人員 一三人（連絡艇ヲ搭載セル場合）
 ハ 運搬具甲及乙ニ附スヘキ屬品附表第二ノ如シ

主要諸元

全長	五・六〇〇米
全幅	一・八〇〇米
深	〇・七三二米
自重	約一・〇〇〇噸
全備排水量	約一・四五〇噸
平均吃水	〇・二七五米
速力	二〇節—二四節
航續力	約五時間
機關名稱	ニッサン一八〇型自動車用機關又ハトヨダB型自動車用機關
機關型式	六氣筒直列水冷式
機關出力	七〇馬力—八〇馬力（毎分二、八〇〇回轉）
乗員	一名

四 附隨兵器

連絡艇甲一型ニ附隨セシムヘキ兵器左ノ如シ

搭乗者用救助具

爆 雷 (一) 技研

偽 裝 網 (十) 技研

軍事極秘

第五機(秘)密兵器取扱區分

科 長
主任者

陸軍中佐

陸軍少佐

陸軍大尉

陸軍技術中尉

陸軍中尉

陸軍技術中尉

内 山 鐵 男

淺 香 好 朗

赤 林 三 孝

岩 崎 三 郎

中 馬 章

大 島 明

賀 田 彬 甫

牧 澤 義 德

倉 田 順 平

蓮 井 沿

配布先

兵改本(二三)
兵器校廣分(二)

一研(二) 四研(二) 船司(二) 船廠(二) 船練(二)

陸軍技術少尉
陸軍臨時囑託

岡田 勇
大内 順
小瀧 貞吉

裏面白紙

附表 第一

連絡艇甲一型 部品及豫備品表

備考	品 目	固有三基數	摘 要	品 類											豫備品
				品 目	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	入 数	
三基數部品ノ内容員數ハ概ネ三艇ニ對スルモノトス	じょうと	一		吊 上 索	一										機關部豫備品トス
	模 合 索	二	徑一六糸 長サ一〇米トス	被 布	一										
	時 計	一	代用品ニテ可ナリ	塗 水 取	一										
	鉤 竿	一	部隊ニテ裝備スルモノトス	始 動 ハ ン ド ル	一										
	圓 形 油 差	一		小 自 在 フ ラ イ ヤ	一										
	ねじ 同 一 號 六 短	一		點 火 栓 シ リ ン ダ 頭 ス バ ナ	一										
	基 數 屬 品 箱	一		グ リ ー ス ポ ン プ	一										
	品 入 数		選定品トス	兩口スバナ $1\frac{1}{2} \times \frac{5}{8}$ / 16	一										
	品 入 数		日産一八〇型發動機使用ノ場合ヲ	兩口スバナ $3 \times \frac{5}{8}$ / 16	一										
	品 入 数		示ス、他發動機使用ノ場合ハ之ニ準ズ	二百耗片口自在スバナ	一										
	品 入 数			入 数	一										

附表第二

通板具甲種品表

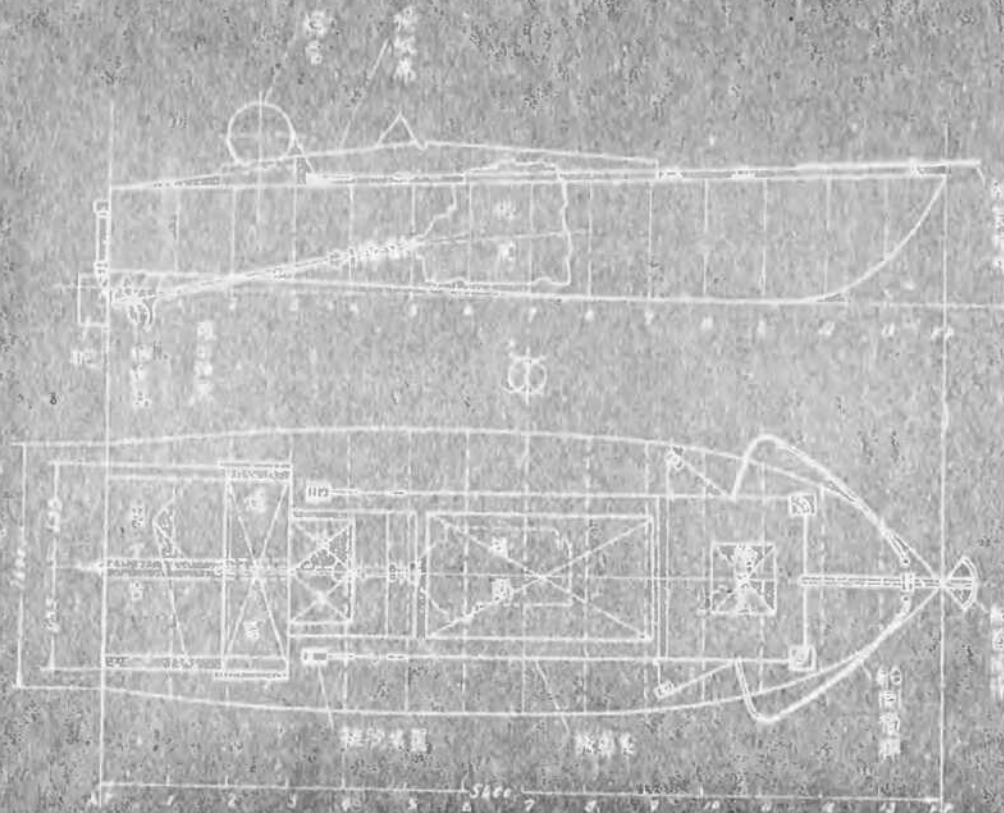
品目	員	測	要
白磁鉢	二平	徑一五〇、長一五〇、〇〇〇	要
"	"	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	"
"	"	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	"
"	"	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	"
"	"	徑一〇〇、長一〇〇、〇〇〇	"
"	"	徑一〇〇、長一〇〇、〇〇〇	"
"	"	徑八〇、長八〇、〇〇〇	"

通板具乙種品表

品目	員	測	要
白磁鉢	六平	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	要
"	五平	徑一八〇、長一八〇、〇〇〇	"
"	八平	徑二五〇、長二五〇、〇〇〇	"
"	一平	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	"
"	二平	徑二〇〇、長二〇〇、〇〇〇	"
"	一平	徑一〇〇、長一〇〇、〇〇〇	"
"	二平	徑一〇〇、長一〇〇、〇〇〇	"
"	一平	徑八〇、長八〇、〇〇〇	"



裏面白紙



船體中(艙艙)位置圖

附圖第二

運給機甲一型選機具甲



附圖第三

運給機甲一型選機具乙



軍事秘密

編制第七十一條
適用濟後燒却

十技研研報第五號(〇巻1)

乗員救助方式研究報告

昭和十九年十月十八日
第十師團重技術研究所

裏面白紙

乗員救助方式研究報告

第一 研究ノ趣旨

昭和十九年八月九日陸軍政技審第一四一三號通牒ニ據リ炸藥前装式連綿（甲三型）ノ衝突ニ依ル燃雷ノ威威力ニ對シ乗員ヲ救助スル方法並其ノ資材ニツキ研究ヲ開始ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

1 乗員ハ二〇〇呎距離ノ燃雷北點ヲ距ル七（七）米以上ノ海面ニ仰臥スルコトニ依リ完全ニ燃雷ノ動作ヲ除去シ得ヘシ

2 試製連綿乗員用救助具ハ構造及性能共ニ概ネ適當ニシテ容易ニ前項乗員救助ノ目的ヲ達シ得ヘシ

二 將來ノ處置

將來ノ所要ヲ考慮シ試製連綿乗員用救助具ノ兵器運送要領及兵器仕樣書ヲ調製準備ス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

昭和十九年八月中旬燃雷爆破時ニ於ケル燃雷ノ傳播、人々ニ及ボス影響及之ニ對スル
救助法並其ノ資料ニツキ研究ヲ開始ス

二 救助具ノ設計

燃雷及實験ノ結果ニ基キ連絡艇中三型乗員ノ救助ヲ判決所數第一項ニ依ルコト、シ昭和
十九年八月中旬之ニ應スル試製連絡艇乗員用救助具ノ設計ヲ實施ス

三 救助具ノ試作

1 試作工場 東京輕量兵器株式會社

2 試作經過 昭和十九年八月二十日試作ニ着手シ同年八月二十八日之ヲ完了ス

四 救助具ノ試験

自昭和十九年九月二日至同年九月四日同兵器株式會社東京灣岸附近海面ニ於テ試製連絡艇乗員
用救助具ノ實用試験ヲ實施ス

其ノ結果本救助具ハ概ネ所期ノ性能ヲ有シ實用ニ供シ得ルモ其ノ構造ニ於テ一部改修ノ
要ナルヲ認ム

五 救助具ノ改修

試験後設計圖ニ所與ノ修正ヲ行ヒ昭和十九年九月中旬其ノ研究ヲ終了ス

一 目的用途

本救助具ハ連絡機ヨリ脱出セル乗員ヲ海面ニ浮上仰臥セシメテ爆雷ノ機軸ニ依ル水壓ノ動作ヲ防止スルモノナリ

二 構造機能ノ大要

本救助具ハ外面ニ防水ヲ施セル綿布内部ニ「カボック」ヲ有シ乗員ノ上半身及下肢ノ大部ヲ被ヒ密ルモノトス

其ノ構造及使用ノ状況寫真第一及第二ノ如シ

三 主要諸元

1 重量 乾燥状態ニ於テ約二匁

2 浮力 乾燥状態ニ於テ約十八匁

五十時間浸水後ノ状態ニ於テ約八匁

第五 機（秘）密兵器取扱區分

第四 試製連絡機乗員用救助具概説

第六 研究擔任者

科 長 陸軍中佐 内 山 繁 男
主任者 陸軍技術少 正 田 弘

配布先

兵政本 (二三) 船司 (一) 船底 (一) 船練 (一)



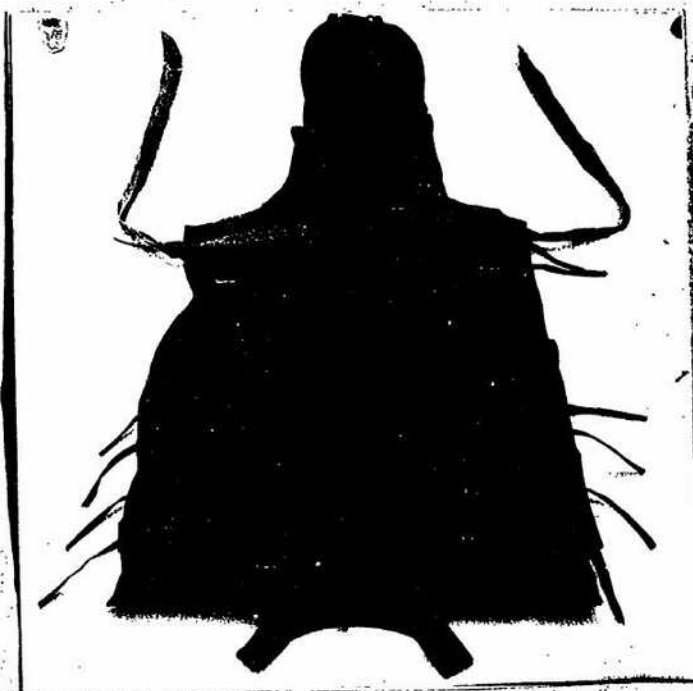
寫眞第二(其二)



寫眞第二(其一)



寫眞第一(其二)



寫眞第一(其一)

裏面白紙



寫眞第二(其三)

6

軍事秘密

規則第七十一條
適用 用済後焼却

十技研研報第六號 (◎材質)

舟艇消火裝置研究報告

昭和十九年十月二十一日
第十陸軍技術研究所

裏面白紙

舟艇消火装置研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年三月八日附兵政技機密第五號訓令ニ據リ舟艇内ニ於ケル火災ヲ迅速ニ消火シ得ル装置及方法ニ就キ研究ヲ開始シ同年六月十日附兵政技機密第一三號訓令ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

1 試製三〇〇立及一五〇立泡沫式消火装置ハ構造機能概ネ所要ノ要件ヲ具備シ舟艇消火ノ主装置ニ使用シ得ルモノト認ム

2 高速輸送艇及驅逐艇程度ノ船用舟艇ニ發生スル火災ハ試製泡沫式消火装置ヲ主体トシ之ニ氣化式消火装置及手持式消火装置（泡沫式及氣化式）等ヲ併用スルコトニ依リ概ネ完全ニ之ヲ消火シ得ルモノト認ム

二 將來ノ處置

試製三〇〇立及一五〇立泡沫式消火装置ノ兵器用圖書ヲ整備ス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

類似舟艇ニ實用シアル装置ノ調査及舟艇消火ニ使用シ得ル藥品ノ検討等ニ依リ舟艇消火ノ主

体ヲ泡沫式消火装置ニ求ムルヲ適當ト認メ昭和十九年三月末其ノ研究ヲ開始ス

二 設 計

1 三〇〇立泡沫式消火装置

昭和十九年六月上旬其ノ設計ニ着手シ六月下旬之ヲ完了ス

2 一五〇立泡沫式消火装置

昭和十九年七月上旬其ノ設計ニ着手シ七月下旬之ヲ完了ス

三 試 作

1 試作工場 中央理化工業株式會社

2 試作經過

イ 三〇〇立泡沫式消火装置

昭和十九年六月下旬其ノ試作ニ着手シ八月上旬之ヲ完成ス

ロ 一五〇立泡沫式消火装置

昭和十九年八月上旬其ノ試作ニ着手シ九月上旬之ヲ完成ス

四 試 験

1 自昭和十九年八月二十五日至昭和十九年八月二十九日間兵庫縣廣津市阿成市川河口附近

ニ於テ試製三〇〇立泡沫式消火装置ノ構造、機能ヲ檢シ其ノ實用試験ヲ實施シテ左ノ判決

ヲ得タリ(十技研要第六號)

イ 試製三〇〇立泡沫式消火裝置ハ其ノ構造ニ於テ一部修正ヲ要スルモ概ネ所期ノ性能ヲ

具備シ實用ニ供シ得ルモノト認ム

ロ 高速輸送艇ニ發生スル火災ハ試製三〇〇立泡沫式消火裝置二組、氣化式消火裝置一組
及手持式消火裝置一〇組ニ依リ概ネ完全ニ之ヲ消火シ得ヘシ

2 自昭和十九年九月二十七日至昭和十九年九月三十日間東京都向島區吾嬬町一丁目中央理
化工業株式會社内ニ於テ試製一五〇立泡沫式消火裝置ノ構造機能及
其ノ實用價值ヲ檢シ第一
一回試驗ニ把握シ得サリシ同裝置ノ基礎諸件ヲ探求シテ左ノ判決ヲ得タリ(十技研要第一
一號)

イ 試製一五〇立泡沫式消火裝置ハ構造機能概ネ所期ノ要件ヲ具備シ實用ニ供シ得ルモノ
ト認ム

ロ 驟逐艇ニ發生スル火災ハ試製一五〇立泡沫式消火裝置一組、氣化式消火裝置一組及手
持式消火裝置六組ニ依リ概ネ完全ニ之ヲ消火シ得ヘシ

ハ 泡沫式消火裝置ノ配管ハナシ得ル限り之ヲ簡單ナラシムルヲ要ス

改 修

試験後設計圖ニ所要ノ修正ヲ行ヒ昭和十九年十月中旬其ノ研究ヲ終了ス

第四 舟艇消火裝置概説

目的用途

高速輪船艇、驟然燃及之ト同等程度ノ舟艇類ニ裝備シ該舟艇ニ發生スル火災ヲ迅速ニ消火スルニ使用スルモノトス

構造、機能ノ大要

1 試製泡沫式消火裝置ハ壓縮空氣又ハ壓縮炭酸「ガス」ニ依リ甲乙二種ノ藥液ヲ送出反應セシメテ炭酸「ガス」ヲ含有スル泡沫トナシ之ヲ火焰ニ被覆シテ消火ノ目的ヲ達成スルモノナリ

使用藥劑及藥液ノ組成左表ノ如シ

消火藥劑ノ組成（重量比）			
甲		乙	
重炭酸ソーダ	八四%	硫酸アルミニウム	乾燥粉末 一〇〇%
蛋白質ノアルカリ處理物	一二%		
樹脂ノアルカリ處理物	四%		

消火藥液ノ組成（重量比）			
藥液 甲		藥液 乙	
水	九一・〇%	水	八三・三%
劑	九・〇%	劑	一六・七%

2 試製三〇〇立及一五〇立泡沫式消火裝置ハ共ニ藥液槽甲、乙室、混合槽、空氣槽、「ホ
 ー」ス、配管及噴射口等ヨリ成リ其ノ構造附圖第一及第二ノ如シ

3 藥液槽甲及乙室ハ夫々藥液甲及乙ノ容器ニシテ藥液送出管ニ依リ混合槽ニ連絡ス

4 空氣槽ハ藥液送出用壓縮空氣又ハ壓縮炭酸「ガス」ノ容器ニシテ左右二個ヨリ成リ其ノ
 一個ニ壓力計、空氣送出管及起動弁ヲ附屬ス

壓力計ハ空氣槽内ノ壓力ヲ指示ス

空氣送出管ハ空氣槽ヲ藥液槽甲（乙）室ニ連絡シ壓縮空氣又ハ壓縮炭酸「ガス」ヲ藥液槽

ニ導入スルモノトス

起動弁ハ空氣送出管中ニ位置シ銅板ニ依リテ空氣槽ト藥液槽トノ連絡ヲ遮斷シ其ノ破壞ニ

依リ壓縮空氣又ハ壓縮炭酸「ガス」ヲ藥液槽ニ導入スルモノトス

- 5 「ホース」ハ「ゴム」製ニシテ長さ一〇米内徑二五耗又ハ一八耗ヲ有シ發生セル泡沫ヲ放射スルニ用フルモノトス
- 6 配管ハ鋼製管ニシテ所要ノ長さ及内徑ヲ有シ發生セル泡沫ヲ舟艇内要所ニ分配スルニ用フルモノトス
- 7 噴射口ハ配管ノ端末ニ位置シ泡沫ヲ廣ク擴散分布セシムルニ用フルモノトス

主要諸元

試製三〇〇立及一五〇立泡沫式消火裝置ノ主要諸元左表ノ如シ

諸元	試製三〇〇立泡沫式消火裝置	試製一五〇立泡沫式消火裝置
全長	一・三八五 米	一・二〇九 米
幅	〇・八七二 米	〇・六〇四 米
高さ	〇・九七六 米	〇・七〇〇 米
重量	三三〇 瓩	一四〇 瓩

藥液槽	混合槽	空氣槽	ホース	泡沫發生量	發生泡沫ヲ以テ消火可能ナル床面積
甲室容最 二二・一立 乙室容最 二二・三・五立	容最 三・四九立	一個ノ容最 一七・八立 空氣壓力 二〇瓩ノ細	長サ 一〇米 内徑 二五	一、五〇〇立	三七平方 米
甲室容最 一一・四・七立 乙室容最 五八・四立	容最 一・七九立	一個ノ容最 一一・五立 空氣壓力 二〇瓩ノ細	長サ 一八〇 内徑 一八〇	九〇〇立	二二平方 米

第五機(秘)密兵器ノ取扱區分

軍事秘密

第六 研究擔任者

科長

陸軍中佐

内

山

鉄

男

主任者

陸軍技術少佐

佐

藤

雅

夫

陸軍技術少尉

正

田

弘

弘

配布先

兵政本(一三) 三研(一) 四研(一) 八研(一)

7

軍事秘密

規則第七十一條
適用 海陸軍
十技研研報第七號 (○冊 9 〃)

木製大發動機研究報告其ノ一
(純鉛「ロケ」機関附木製大發動機ニ關スル研究)

昭和十九年十月二十八日
第十陸軍技術研究所

裏面白紙

木製大發動艇研究報告其ノ一
(純船「ロケ」機關附木製大發動艇ニ關スル研究)

第一 研究ノ起因

昭和十九年六月十日附兵政技機密第一三號訓令ニ據リ現制木製大發動艇ノ舟体ニ船用化車輛用機關ヲ裝備セル補給用舟艇ニ就キ研究ヲ開始シ昭和十九年七月二十二日附兵政技機密第一六號訓令ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

試製純船「ロケ」機關附木製大發動艇ハ概ネ所期ノ性能ヲ具備シ實用ニ適スルモノト認ム
將來ノ處置

試製純船「ロケ」機關附木製大發動艇ノ兵器用圖書ヲ整備ス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

昭和十九年六月中旬現制木製大發動艇ニ純船「ロケ」機關ヲ裝設スル方法ニ就キ研究ヲ開始ス

二 設計

昭和十九年七月中旬設計ニ着手シ同年八月下旬之ヲ完了ス

三 試作

1 試作工場 廣島縣安藝郡坂村増岡造船所

2 試作經過 昭和十九年八月下旬試作ニ着手シ同年十月上旬之ヲ完成ス

四 試験

自昭和十九年十月十三日至昭和十九年十月十七日間廣島灣ニ於テ試作艇ノ實用試験ヲ實施シ
左ノ判決ヲ得 (十技研發第一二號)

純船「ロケ」機關附木製大發動艇ハ構造機能良好ニシテ實用價值充分ナルモノト認ム

五 改修

試験後設計圖ニ所要ノ修正ヲ行ヒ昭和十九年十月下旬其ノ研究ヲ終了ス

第四 試製純船「ロケ」機關附木製大發動艇概説

一 目的用途

鐵製大發動艇ノ代用トシテ兵器、材料、人員及馬匹等ノ海上補給輸送ニ使用スルモノトス
構造機能ノ大要

本艇ハ船体部、機関部及所製ノ屬品豫備品ヨリ成ル(附圖第一)

1 船体部ハ船殼、操舵裝置、繫船裝置、荷役裝置、吊上裝置、機裝品及揚備機ヨリ成ル
船体部ノ構造及機能ハ概ネ現制木製大發動機ノモノニ同シ 但シ艀部甲板ヲ若干高上シ同
部底部ヲ稍々擴大ス

2 機関部ハ主機械(附圖第二)、機關操縱裝置、軸系裝置、燃料裝置、冷却水管裝置及排
氣裝置ヨリ成ル

主機械ハ純舶「ロケ」機關(船用四式水冷直六筒「ジーゼル」發動機)一基トス

主機械ヲ除ク機関部各部ノ構造及機能ハ概ネ現制木製大發動機ノモノニ同シ

主要諸元

全長	一四・五〇〇米
幅	三・三〇〇米
深サ	一・五〇〇米
艇体自重	約一・〇〇〇噸
平均吃水	〇・八〇〇米
艀内面積	二三・七〇〇平方米

艀内容積 二四・九〇〇立方米

搭載量 約一二・五噸(武装兵八〇名又ハ馬匹一〇頭)

巡航速力

常備狀態 七・七三節

輕荷狀態 八・三四節

機關

名稱 純舶「ロケ」機關(船用四式水冷直六筒「ジーゼル」發動機)

出力 八〇馬力(毎分一、五〇〇回轉)

推進器

軸數 一

直徑 〇・五〇〇米

「ピンチ」 〇・三〇〇米

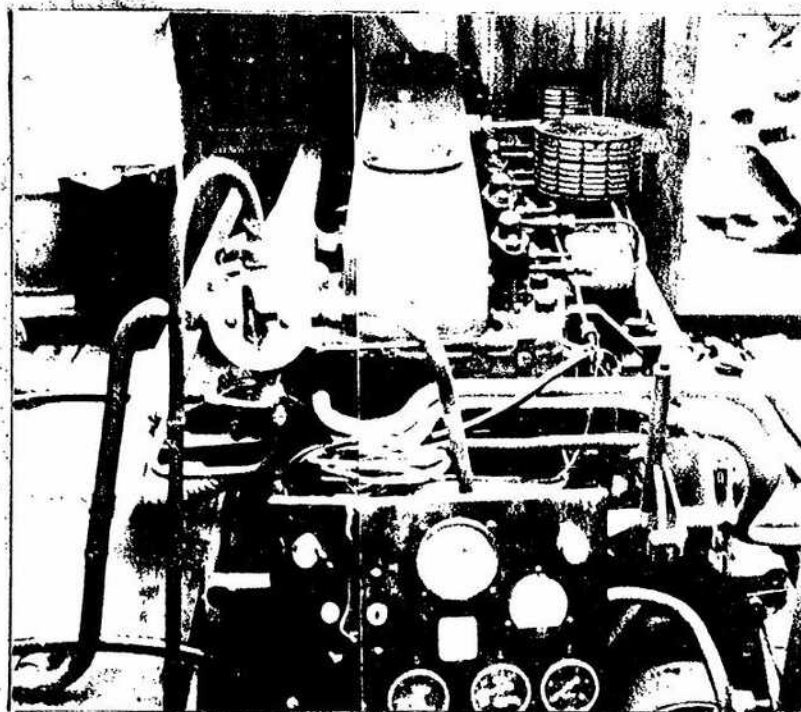
第五 機(秘) 密兵器ノ取扱區分

普通

第六 研究擔任者



附圖第二「ロケ」機關附木製大發動艇



附圖第二「ロケ」機關附木製大發動艇主機械

配布先

兵政本(二三) 三研(二) 四研(二)

科長	陸軍中佐	内山	鐵男
主任者	陸軍少佐	淺香	好朗
	陸軍技術大尉	伊藤	夫
	陸軍技術中尉	大塚	吳

裏面白紙

裏面白紙

軍事秘密

規則第七十一條
適用済後廃却

十技研研報第八號 (船舶機6)

昭和十九年十一月三日
陸軍技術研究所

陸上機関應急利用研究報告

裏面白紙

陸上機關應急利用研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年六月十日附兵政技密第一三號訓令ニ據リ各種自動車用「ガソリン」機關ヲ最小限ノ改修ニ依リ連絡艇主機關ニ利用スル方法ニ就キ研究ヲ開始シ同年八月九日附兵政技密第一四一三號通牒ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

1 出力六五馬力以上ヲ有スル各種自動車用「ガソリン」機關ハ若干ノ加修ニ依リ連絡艇主機關ニ利用シ得ルモノト認ム

2 連絡艇主機關ハ整備ノ所要及改修ノ難易等ヲ考慮シ差當リ左ノ機關ヲ改修使用スルヲ適當ト認ム

日産一八〇型自動車機關

豐田KB型自動車機關

「フォード」乗用車用及貨車用自動車機關

「シボレー」R型及RM型自動車機關

「プリムス」自動車機関

二 將來ノ處置

判決第二項ノ各種自動車機關ニ就キ其ノ船用化要領書ヲ整備ス

第三 研究經過ノ概要

一 試製船用化日産自動車機關

- 1 昭和十九年六月十日附兵政技密第一三號訓令ニ基キ同年六月十五日其ノ設計ニ着手シ同年六月廿五日之ヲ完了ス
 - 2 同年六月下旬横濱機械株式會社ニ於テ部品ノ製作ヲ又南國特殊造船株式會社ニ於テ機關ノ改修ヲ開始シ同年七月八日之ヲ完了ス
 - 3 同年七月中旬東京郡荒川水域及千葉縣岩井海岸ニ於テ本機關ヲ裝備セル連絡艇ノ實用試驗ヲ實施シ機能既ニ良好ニシテ實用ノ價值アルヲ確認ス
 - 4 同年八月八日附兵政技密第一三〇四號通牒ニ據リ連絡艇速度増加對策ノ一トシテ機關ノ出力増大ニ關スル研究ヲ實施シ既ニ所期ノ成果ヲ得テ研究ヲ終了ス
- 二 試製船用化豐田自動車機關
- 1 昭和十九年六月十日附兵政技密第一三號訓令ニ基キ同年六月二十二日其ノ研究ニ着手

手ス

2 同年七月中旬川崎車輛株式會社ニ於テ機關ノ改修ヲ開始シ同年七月二十日之ヲ完了ス

3 同年七月下旬機關ノ竣工検査ヲ實施シ機能良好ニシテ實用ノ價值アルヲ認め研究ヲ終了ス

三 試製船用化「フォード」自動車機關

1 昭和十九年八月九日附兵政技密第一四一三號通牒ニ基キ同年八月三十日其ノ研究ニ着手ス

2 同年九月上旬三菱重工業株式會社東京機器製作所ニ於テ機關ノ改修ヲ開始シ同年九月十九日之ヲ完了ス

3 九月中旬横濱沖及東京都荒川水域ニ於テ本機關ヲ裝備セル連絡艇ノ實用試験ヲ實施シ實用ノ價值アルヲ認め研究ヲ終了ス

四 試製船用化「シボレー」自動車機關

1 昭和十九年八月九日附兵政技密第一四一三號通牒ニ基キ同年九月十日其ノ研究ニ着手ス

2 本機關ハ製作年次及型式ニ依リ其ノ出力ヲ異ニスルヲ以テ利用機關ヲR型貨車用及

HM型貨車用ニ限定シ之ニ豐田自動車機關ニ準スル改修ヲ實施ス

3 同年九月中旬同機關改修ノ爲大阪陸軍造兵廠ニ對シ所長ノ技術指導ヲ實施ス

4 同年十月上旬機關ノ竣工試験ヲ實施シ機能良好ニシテ實用ノ價值アルヲ認め研究ヲ
終了ス

其 試製船用化「プリムス」自動車機關

1 昭和十九年八月九日附兵政技密第一四一三號通牒ニ基キ同年九月十五日其ノ研究ニ
着手ス

2 同年十月上旬三菱重工業株式會社東京機器製作所ニ於テ機關ノ改修ヲ開始シ同年十
月十五日之ヲ完了ス

3 同年十月中旬機關ノ竣工試験ヲ實施シ機關ノ出力稍々小ニシテ若干連絡艇ノ速力ヲ
低下スルモ尙本實用ニ供シ得ルモノト認め研究ヲ終了ス

六 其ノ他ノ自動車機關

1 昭和十九年八月九日附兵政技密第一四一三號通牒ニ基キ前項諸機關ト同時ニ「グラ
ハムページ」「ボンテアツク」「ダツヂブラザー」「オールズモビル」「スチュー

- ドベーカー」「テラブレン」及「ハドソン」自動車機関改修ノ研究ニ着手ス
- 2 同年十月五日附兵政技審第一七七二號通牒ニ據リ爾後ノ試作ヲ中止シ全体裝置圖ノ作製ヲ以テ一應其ノ研究ヲ終了ス

第四 試製船用化自動車機關概説

一 目的用途

連絡艇主機關ニ使用ス

二 構造機能ノ大要

試製船用化自動車機關ノ構造機能ハ連絡艇ノ性能發揮ニ必要ナル最小限ノ改修ヲ實施セル
ル外各種自動車「ガソリン」機關ノモノニ同シ

改修一般ノ要領左ノ如シ(附圖参照)

1 冷却水ポンプヲ除去シ之ヲ船底ニ装着ス

機關本体ニ冷却水機關入口金物及冷却水機關出口金物ヲ新設シ冷却水ヲ出入シ機關ヲ
冷却ス

「オイルパン」下方ニ冷却槽ヲ熔着シ冷却水ヲ循環シ潤滑油ヲ冷却ス

2 機關台ニ適スル機關取付金物ヲ新設ス

- 3 空氣清淨器ヲ除去シ簡易ナル氣化器蓋ヲ装着ス
- 4 變速機ヲ除去ス 但シ「フオード」竝ニ「プリムス」自動車機關と於テハ直結用齒車ノミヲ固定シ他ノ齒車及變速槓桿ヲ除去ス

主妥諸元

各種試製船用化自動車機關ノ主妥諸元附表ノ如シ

第五機(秘)密兵器ノ取扱區分

普通

第六研究擔任者

科長	陸軍中佐	內山鐵
主任者	陸軍技術少佐	渡部武男
	陸軍技術大尉	林二郎
	陸軍技術中尉	岩崎三郎
	陸軍技術中尉	蓮井浩
	陸軍臨時囑託	太內順

順 浩 郎 郎 武 男

配布區分

兵政本(二三) 四研(二) 相造(二) 大造(二)

裏面白紙

附表

改修機關主要諸元表

番 號	項目	種別	日 産	豐 田	「ア・オー・ド」	「シボレー」	「プリムス」
1	機関型式		180型	K.B型	V 型 8気筒	R 型及 R M 型	
		常用 (1600回 轉ニ於テ)	普通 「イ」 4.5 「ロ」 5.1 「ロ」 5.2	普通 「イ」 4.8 「ロ」 5.0	乗用車用 3.6 貨車用 4.1	R 型 4.5 R M 型 4.0	38.7
2	出力 (馬力)	最高	普通 「イ」 7.0 「ロ」 7.6 「ロ」 7.8 (其ニ2800回分 同轉ニ於テ)	普通 7.1 2300回分同轉ニ於テ 「ロ」 7.7 (其ニ3000回分同轉ニ於テ)	乗用車用 6.3 貨車用 7.4 (其ニ3000回分同轉ニ於テ)	R 型 6.8.5 R M 型 7.4 (其ニ3200回分同轉ニ於テ)	5.6 (2800回分同轉ニ於テ)
3	燃料消費量 立/馬力/時間	常用 (1600回 轉ニ於テ)	普通 「イ」 0.30 「ロ」 0.30 「ロ」 0.29	普通 0.35 「ロ」 0.34	乗用車用 0.38 貨車用 0.41	R 型 R M 型	0.42
		最高	普通 「イ」 0.35 「ロ」 0.32 「ロ」 0.32	普通 0.41 「ロ」 0.39	乗用車用 0.37 貨車用 0.41	R 型 R M 型	0.54
4	気筒数		6	6	8	6	6
5	気筒徑×行程(耗)		82.5×114.3	84.174×101.6		84.174×101.6	
6	重量(駐) (乗機ヲ含フ)		392.0	285.0			
7	機関ノ大キサ (総)	長サ	1118.0	1133.0	1210.0	970.0	1250.0
		幅	620.0	525.0	540.0	430.0	530.0
		高サ	845.0	715.0	650.0	760.0	800.0

備考 一 本表中普通ノ壓縮比6.0「イ」6.2「ロ」6.5ノモノヲ示ス 但シ豐田機關「ロ」ハ6.9トス
 二 機関ノ大キサハ連絡艇用ニ改修セルモノノ寸法ヲ示ス

軍事秘密

規則第七十一條
適用済後除却
十校研研報第九號(船舶機5ノニ)

試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機研究報告

昭和十九年十一月三日
第十陸軍技術研究所

裏面白紙

試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十八年十月一日附兵政技機密第三〇號訓令ニ據リ發動機等ニ裝載スル一五〇馬力級機關ノ研究ヲ開始シ昭和十九年六月十日附兵政技機密第一三號訓令ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判 決

試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機ハ其ノ構造機能共ニ良好ニシテ船用機關トシテ實用ニ適スルモノト認ム

二 將來ノ處置

試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機ノ兵器用圖彙ヲ整備ス

第三 研究經過ノ概要

一 研究開始

昭和十八年十月一日陸軍運輸部ニ於テ擔任シアリタル本發動機ノ研究ヲ第四陸軍技術研究所ニ於テ繼承シ昭和十九年六月八日更ニ之ヲ當所ニ於テ繼承ス

繼承時ニ於ケル本發動機ノ研究ハ設計ヲ完了シ部品加工ノ約四割ヲ實施シアリタル狀態ニ在リ

二 試 作

1 試作工場

三菱重工業株式會社川崎機器製作所

2 試作經過

イ 昭和十八年九月設計ヲ完了ス（於陸軍運輸部）

ロ 昭和十八年七月試作ニ着手ス（於陸軍運輸部）

ハ 昭和十九年八月二十八日試作ヲ完了ス

三 試 驗

自昭和十九年八月二十九日至昭和十九年九月十五日間神奈川縣川崎市三菱重工業株式會社川崎機器製作所ニ於テ本機ノ臺上試驗ヲ實施シ左ノ判決ヲ得（十技研要第九號）

試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機ハ其構造ニ於テ一部改修ヲ要スルモ概ネ所期ノ性能ヲ具備シ船用機關トシテ實用ニ供シ得ルモノト認ム

四 改 修

試験後設計圖ニ所與ノ修正ヲ行ヒ昭和十九年十月下旬其ノ研究ヲ終了ス

第四 試製一三〇馬力「ジーゼル」發動機概説

一 主目的用途

大型發動機、戦半艇等ノ主機關トシテ使用スルモノトス

二 構造機能ノ大要

本發動機ハ純然タル船用「ジーゼル」機關トス

1 本發動機ノ構造附圖第一乃至第四ノ如ク其ノ特徴左ノ如シ

イ 燃焼方式「サウラー」型複渦流直接噴射式トス

ロ 上下「クランク」室ヲ一体トシ氣筒ニ螺旋式「ブッシュ」ヲ使用ス

ハ 冷却水「ポンプ」、油「ポンプ」及排水「ポンプ」ヲ齒車式トシ之ヲ發動機本体側壁ニ設置ス

ニ 「クラッチ」ヲ多板摩擦式トシ之ヲ傘齒車式逆轉機ト一体ニ結合ス

ホ ハズミ駆動ニ揚錨機聯動裝置ヲ裝備ス

ヘ 將來ノ要求ヲ考慮シ始動用發動機ノ使用ヲ可能ニス

2 本發動機ノ性能附圖第五乃至第七ノ如シ

三 主要諸元

機關型式

水冷四「サイクル」直接噴射渦流燃焼室式直六筒「ジーゼル」發動機

寸 度

全 長 二二〇〇 耗

最 大 幅 七六〇 耗

軸 下 高 四〇〇 耗

軸 上 高 八〇〇 耗

出 力

常 用 一三〇馬力（毎分一、五〇〇回轉）

最 大 一四六馬力（毎分一、五六〇回轉）

氣筒内徑 一三〇 耗

行 程 一八〇 耗

壓縮比 一五・二

回轉方向 鍋ヨリ見テ右

最低回轉數
燃料消費率

每分五〇〇回轉
每時每馬力二一〇瓦以下
一、二〇〇疋

(逆轉機ヲ含ミ滑油及冷却水ヲ含マス)

第五 機(秘)密兵器ノ取扱區分

普通

第六 研究擔任者

科長

陸軍中佐 内山

部

敏

郎

主任者

陸軍技術少佐 渡部

部

敏

郎

陸軍技術中尉 卷

部

敏

郎

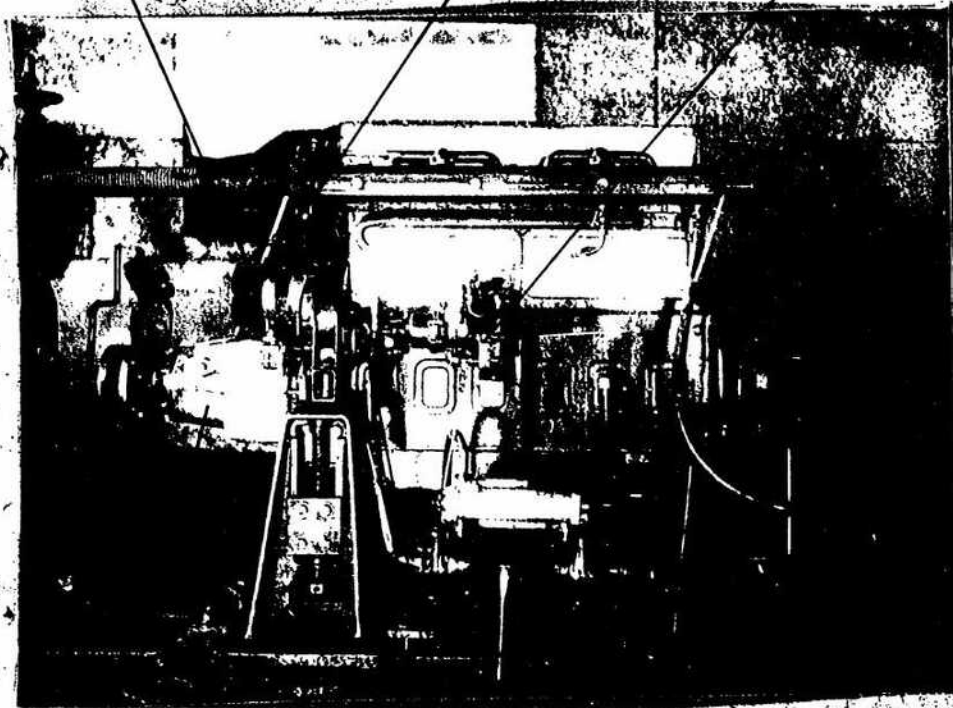
配布先

兵政本(一三)三研(一)四研(一)

裏面白紙

附圖第二 試製一三〇馬力「ディーゼル」發動機
左側外觀圖

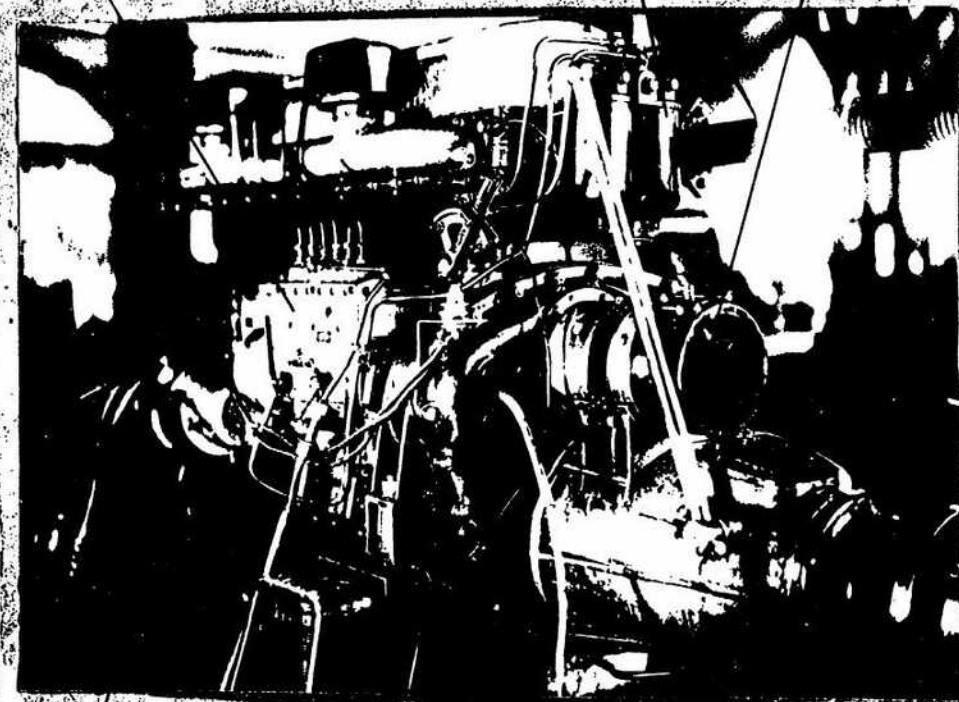
充電發電機 燃料濾過器 排水ポンプ



逆轉機 冷却水ポンプ 滑油冷却器

附圖第一 試製一三〇馬力「ディーゼル」發動機
左側外觀圖

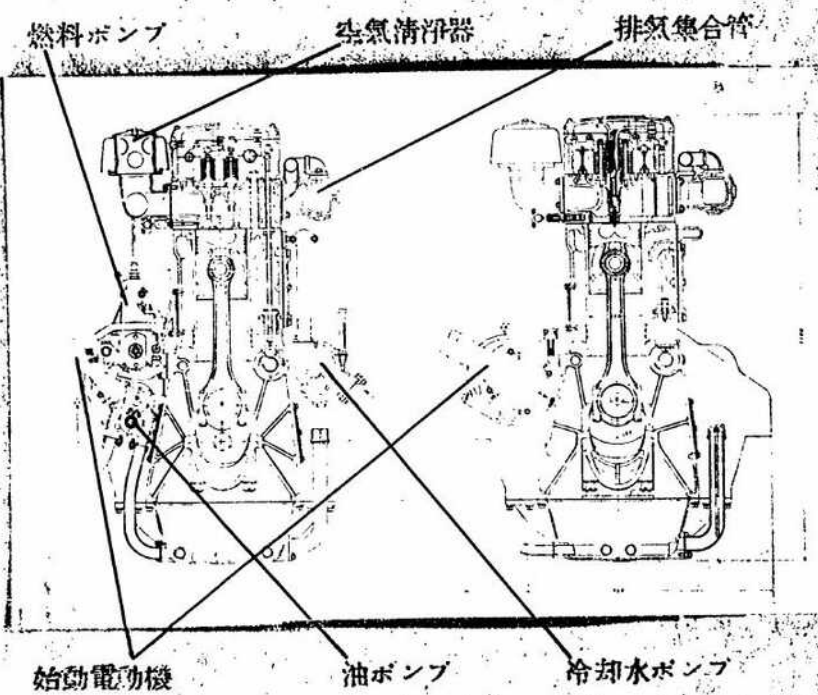
燃料ポンプ 燃料濾過器 充電發電機



始動電動機 逆轉機

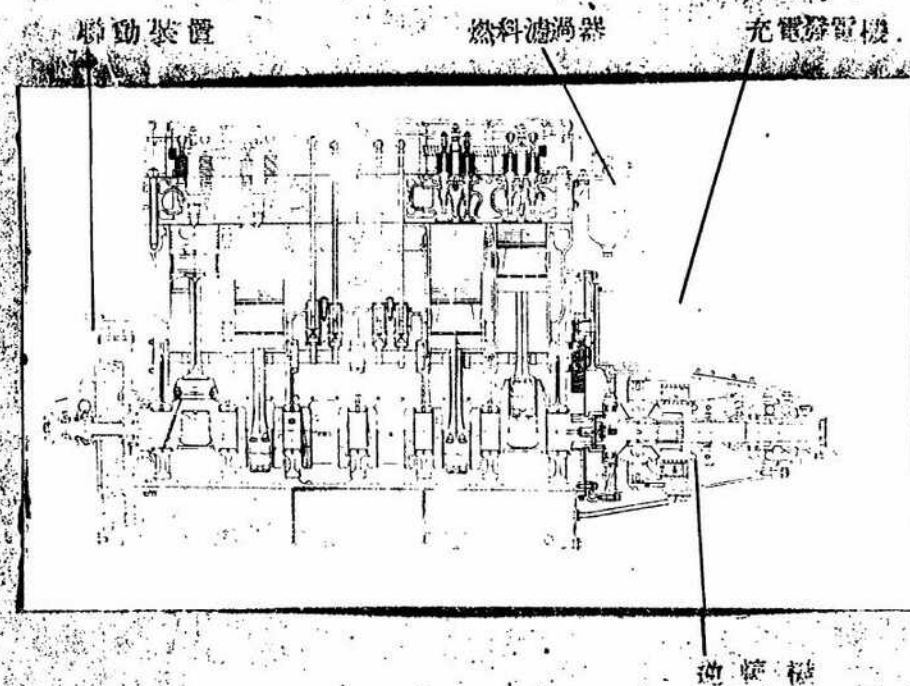
附圖第四 試製一三〇馬力「シーゼル」發動機

横断面圖



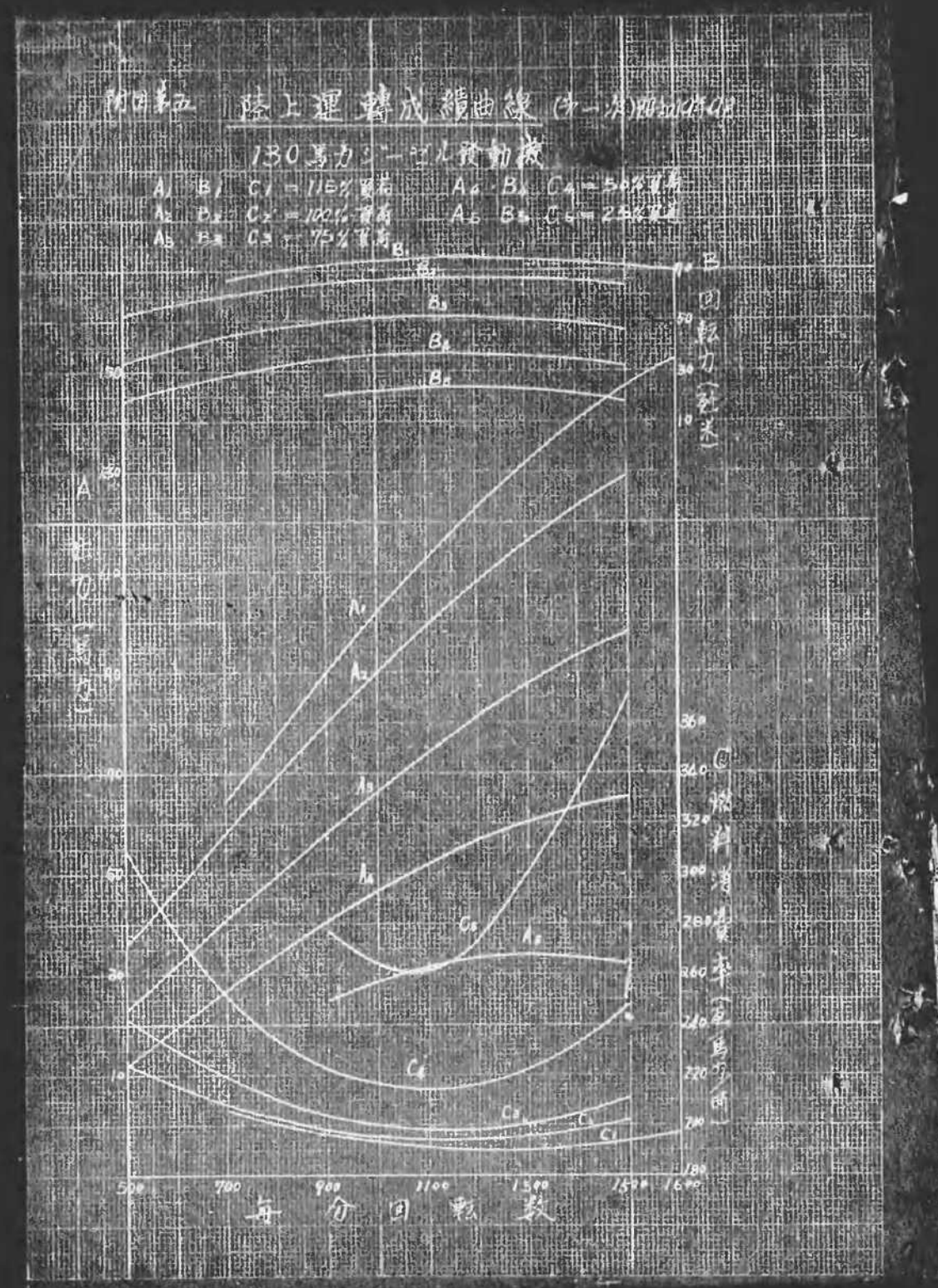
附圖第三 試製一三〇馬力「シーゼル」發動機

縦断面圖





裏面白紙



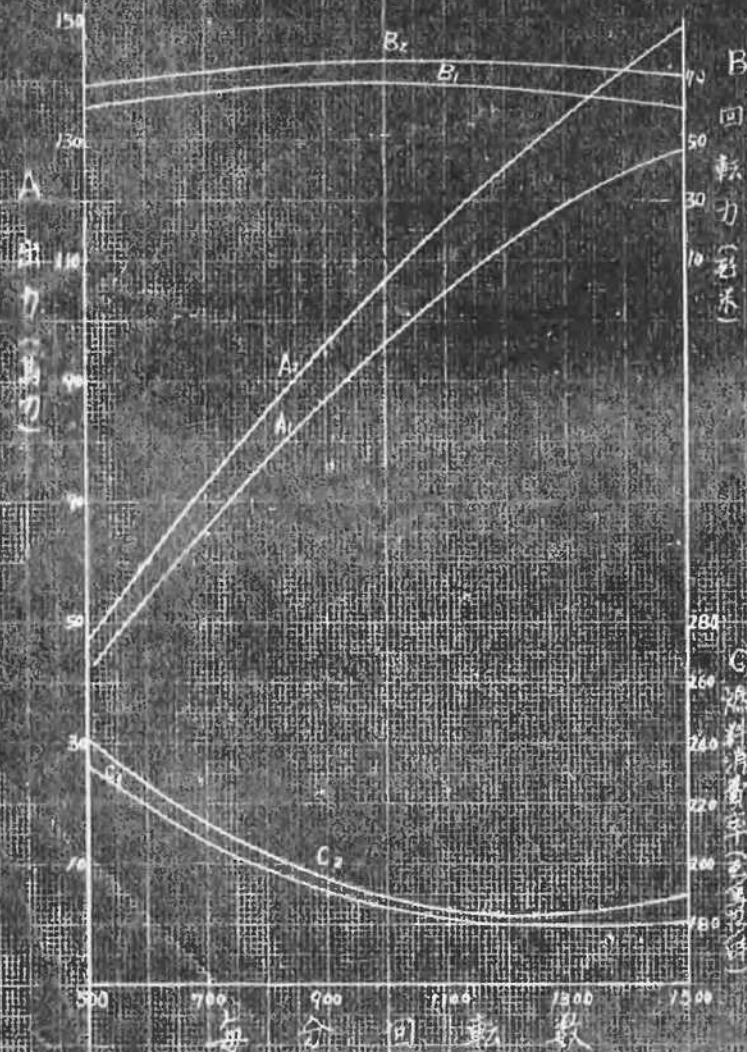


附圖第六

陸上運轉成績曲線 (100%) 昭和17年4月

130馬力シール発動機

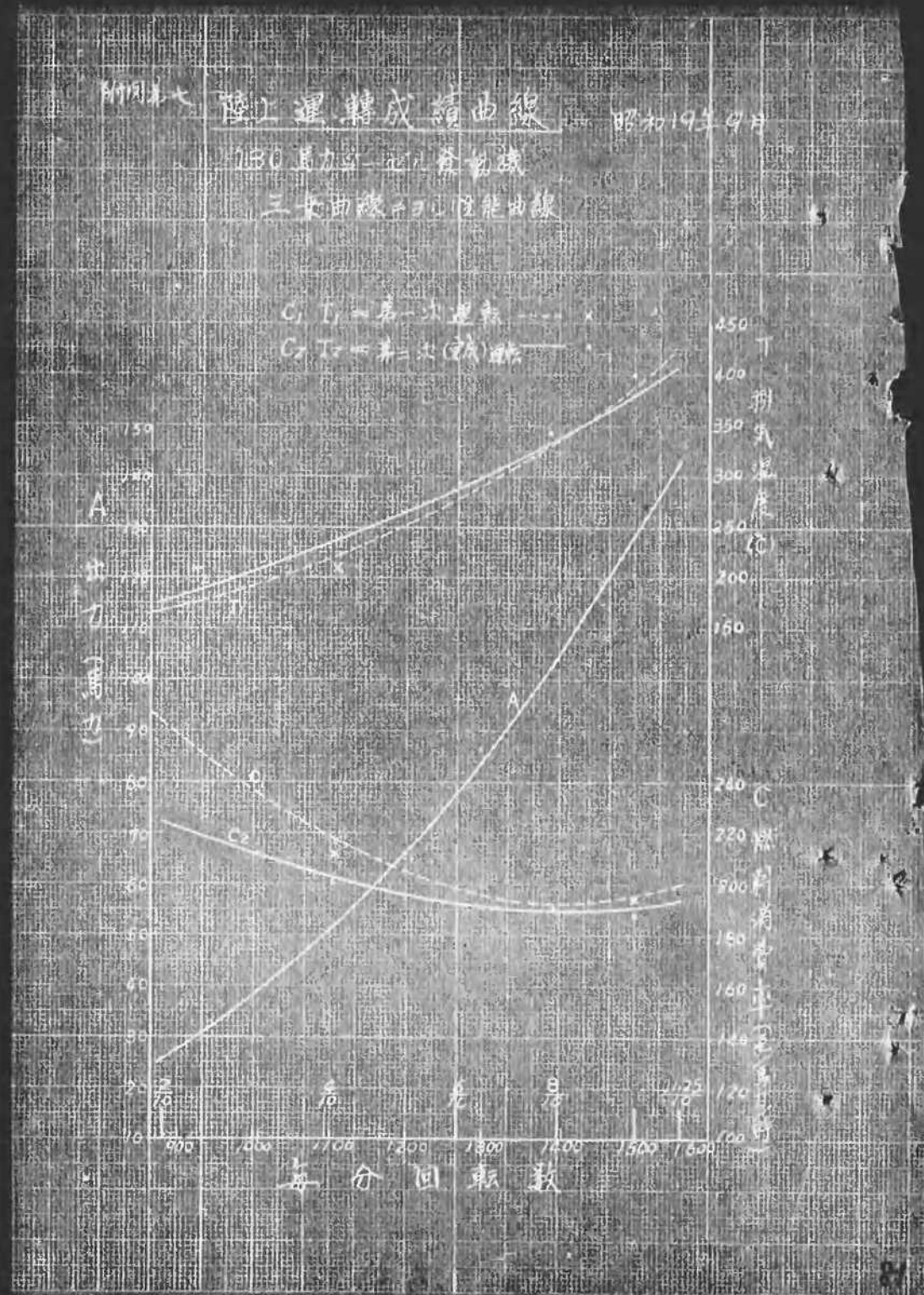
A₁ B₁ C₁ - 100% 負荷
A₂ B₂ C₂ - 115% 負荷



裏面白紙



裏面白紙



10

軍事秘密

通 規則第七十一條
十技研研報第一〇號 (◎舟13)
用 濟 鐵 燒 却

小輸送艇二型研究中間報告

昭和十九年十一月六日
第十陸軍技術研究所

裏面白紙

小輸送艇二型研究中間報告

第一ノ研究ノ起因

昭和十九年六月十日附兵政技機密第一三號訓令ニ據リ現ニ整備途上ニ在ル小輸送艇ノ改良ニ就キ研究ヲ開始シ同年十月二十四日附兵政技機密第一七八一號訓令ニ據リ同艇性能ノ向上ニ就キ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判 決

現ニ整備途上ニ在ル小輸送艇ハ一部ノ小修正ニ依リ實用ニ供シ得ルニ至ルヘシ、但シ構造ノ關係上之ニ十分ナル北方海面航行性能ヲ附與スルコト困難ナリ、將來ノ處置

- 1 小輸送艇二型ノ應急改修ニ必要ナル整備用圖書ヲ整備ス
- 2 北方海面航行ニ必要ナル性能ヲ具備セル小輸送艇ノ研究ヲ續行ス

第三 研究經過ノ概要

昭和十九年七月上旬大阪陸軍造兵廠ノ試作セル小輸送艇二型ノ改良ニ就キ研究ヲ開始ス

自同年七月七日至同年七月十一日間下田沖附近ニ於テ同艇ノ性能試験ヲ實施シ左ノ判決ヲ得(十技研報第二號)

本艇ハ一部小修正ヲ要スルモ構造機能概ネ良好ニシテ實用ニ供シ得ルモノト認ム、北方海面航行ノ爲ニハ水密及耐寒設備ニ於テ尙檢討ヲ要スルモノアルモ甚シク酷寒荒天ナラサル限り差當リノ使用ニ支障ナカルヘシ

自同年八月中旬至同年九月上旬閩靜岡縣燒津造船所ニ於テ同艇改良整備ノ技術指導ヲ實施ス

同年九月下旬大阪陸軍造兵廠作製ノ製作圖ヲ基礎トシ之ニ所要ノ修正ヲ加ヘテ同艇ノ應急改修ニ必要ナル整備用圖面ヲ完成ス

同年十月下旬研究方針變更ノ示達ヲ受領シ一應同艇改良ノ研究ヲ終了ス

第四 小輸送艇二型概説

一 目的用途

主トシテ軍需資材ノ輸送ニ使用ス

構造機能ノ大要

本艇ハ洋式木造船ニシテ船体部、機関部、電氣部及所要ノ屬品、予備品ヨリ成ル、其ノ

般配置附圖ノ如シ

1 船体部

本艇ハ船殻、操舵装置、繫船装置、荷役装置、諸室装置及通信装置ヨリ成ル

イ 船 殻

構造ハ船舶安全法木造船構造規程ニ準據スルモ縱斷面ノ必要上船體並ニ船底ニ縱通材
各一條ヲ増設ス

船殻ハ姿勢低キ縱通甲板ヲ有ス 同甲板ハ艀部ニ於テ斜甲板（艀口内ト同幅ノ縱通端
迄延長ス）ト合体ス

肋骨ハ全テ二材合セトシ輕便且頑強ナル構造トス

ロ 操舵装置

操舵室ニ設備セル操舵機ニ依リ繩端舵柄ヲ操作スル裝置ニシテ其ノ大部ヲ上甲板上ニ
露出シ故障ノ點檢ヲ容易ニス

ハ 繫船装置

艀艀部ニ各二本ノ繫船柱ヲ裝備ス

艀甲板ニ揚錨機（手動）ヲ附付ケ一〇〇疋錨ノ投揚ヲ容易ニス

ニ 荷役装置

艀ヲ欄坐又ハ陸岸ニ達著シ斜甲板ト甲板トニ依リ荷役ヲ容易迅速ニ實施シ得ル構造ト
ス

ホ 諸室装置

甲板下前部ニ艀艀ヲ、中央ニ乗員十名ノ居室ヲ又後部ニ食糧格納庫及簡易ナル炊事設
置ヲ有ス

ヘ 通信装置

操舵室屋上ニ手旗信號台及起倒式燈ヲ裝備シ操舵室一、手旗信號台及操舵室一、機關室間
ニ各一本ノ傳聲管ヲ設備ス

2 機関部

機関部ハ主機關、燃料及滑油裝置、軸系裝置及水管裝置ヨリ成ル

イ 主機關

主機關ハ「チケ」車機關（船用水冷V型一二氣筒「ジゼル」發動機三型）一基トス

ロ 燃料及滑油裝置

燃料及滑油裝置ハ左ノ三油槽ヨリ成リ之ニ所要ノ諸計器、諸管、弁及「コック」等ヲ

設備ス

主燃油槽

一、九四〇立入 二個

補助油槽

三〇〇立入 一個

滑油槽

一三〇立入 一個

ハ 軸系装置

軸系装置ハ四分ノ一減速装置附逆轉機、推力軸、推力軸承及主軸ヲ廻ラネ其ノ端末ニ三枚翼推進器ヲ裝備ス

ニ 水管装置

水管装置ハ滑油冷却器及冷却水管ヨリ成ル

三 電氣部

電氣部ハ電源及充電装置ヨリ成ル

イ 電源

電源ハ一二・一八〇AH蓄電池四個ヨリ成リ主機關ノ始動及諸照明ニ用フ

ロ 充電装置

充電用トシテ主機關ヨリ「ベルト」驅動ニ依ル二四・五〇〇V直流發電機一基ヲ有ス

主要諸元

全 長 一二三・九〇 米

幅 (船体中央部ニ於テ) 四・〇〇 米

深 サ (船体中心線ニ於テ) 二・八七 米

總 噸 數 約五三 噸

平均吃水 (滿載時) 一・七八 米

艙 內 容 積 五六立方 米

積 載 量 三〇 噸

巡航速度 一〇・三六 節

常備狀態 一二・二〇 節

輕荷狀態 一〇・三六 節

機 關 一二・二〇 節

名 稱 「チケ」車機關 (船用水冷V型一二氣筒「シーゼ」發動機三型)

出 力 一五〇馬力 (毎分一五〇〇回轉)

推 進 器 一五〇馬力 (毎分一五〇〇回轉)

軸 數 一〇〇〇 米

直 徑 一〇〇 米

ピ ッ チ 一〇〇 米

裏面白紙

普

通

第五 機(秘)密兵器ノ取扱區分

第六 研究擔任者

科 長

陸軍中佐

神

尾

元

雄

陸軍技術少佐

長

島

義

人

陸軍技術大尉

林

二

郎

郎

陸軍少尉

金

子

俊

三

陸軍中尉

西

井

務

務

配布先

兵本(一三)

大造(一)

裏面白紙

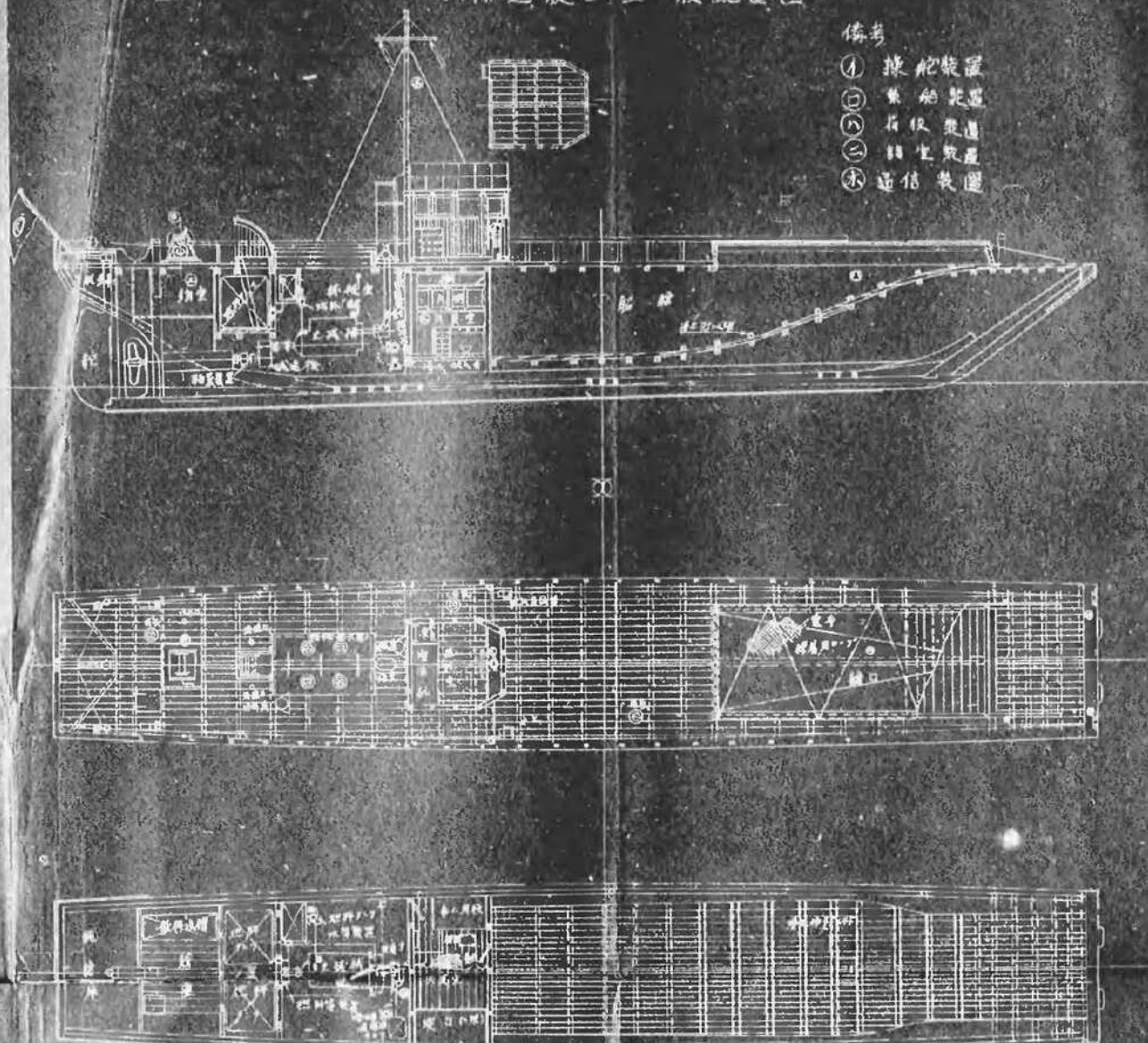
m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

附圖

小輸送艇二型一般配置圖

備考

- ① 操舵装置
- ② 集船装置
- ③ 信号装置
- ④ 衛生装置
- ⑤ 通信装置



裏面白紙

1 : 3 2

軍事秘密

規則第二條

用 後 燒 却

十技研研報第一一號 〇冊 3

波 號 戰 斗 機 二 型 研 究 報 告

昭和十九年十二月十五日
第十陸軍技術研究所

88 (1/2)

裏面白紙

波號戰鬥艇二型研究報告

第一、研究ノ起因

昭和十九年一月二十一日附兵政技密第六〇二號通牒ニ據リ輸送舟艇掩護用トシテ發動艇ト行動ヲ共ニシ得ル武裝舟艇ニツキ研究ヲ開始シ同年三月八日附兵政技密第五〇號訓令及同年六月十日附兵政技密第一三號訓令ニ據リ波號戰鬥艇二型トシテ其ノ研究ヲ繼續ス

第二、研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一、判決

波號戰鬥艇二型ハ舟艇護衛ノ爲速力稍々不足スルノ感アルモ爾余ノ性能良好ナルヲ以テ波號戰鬥艇一型量產可能ノ時發達其ノ代用トシテ實用ニ供シ得ルモノト認ム

二、將來ノ處置

波號戰鬥艇二型ノ整備ヲ豫期シ所要ノ兵器圖、仕様書及取扱説明書ヲ作製ス

第三、研究經過ノ概要

昭和十九年六月八日第三陸軍技術研究所ニ於テ擔任シアリクル本艇ノ研究ヲ繼承ス 續承時迄ノ研究經過左ノ如シ

1 昭和十九年一月下旬研究ヲ開始ス

2 同年二月上旬一五〇馬力波號二型ヲ裝設セルモノニツキ設計ヲ開始ス

3 同年四月二十二日附兵政技第一六七七號通牒ニ據リ裝設機關ヲ六〇馬力波號二型又ハ三型ニ變更セラル

4 前項通牒ニ基キ裝設機關數ヲ検討シ兩者速力ニ大差ナキヲ認メ六〇馬力波號二型ヲ採用スルニ決定ス

5 同年五月上旬設計ヲ概成シ大阪府堺市大原造船鐵工所塲工場ニ於テ其ノ試作ヲ開始ス

昭和十九年九月中旬試作ヲ完了ス
自昭和十九年九月二十五日至同年十月二日間紀伊水道ニ於テ試作艇ノ實用試驗ヲ實施シ左ノ判決ヲ得（十技研要第一〇號）

試製波號戰鬥艇二型ハ構造機能概ネ所期ノ要件ヲ具備シ實用ニ供シ得ルモノト認ム
但シ其ノ速力ハ機關馬力ノ關係上巡航速力九・五節最大速力一〇節ヲ超過スルコト困難ナリ

昭和十九年十月四日附兵政技密第五四四號ニ依リ試製波號戰鬥艇ノ速力向上ニ關シ左ノ示達ヲ受領ス

せに機試驗要報所見ニ於ケルセに艇ノ速力ハ任務上絕對ニ一二節程度(少クモ一節以上)ヲ必要トス。依テ之ヲ増加スル爲六〇馬力機關三臺ヲ裝載セル場合ノ速力ヲ檢討スヘシ。

四 前項示達ニ基キ速力増加ノ對策ヲ檢討シ左ノ判決ヲ得
波號戰鬥艇二型ハ

- 1 機關(六〇馬力「ジーゼル」機關)一臺ヲ増加シ
- 2 各機關ニ減速齒車ヲ附加シテ推進器回轉數ヲ低下シ
- 3 推進器ノ設計ヲ變更

スルコトニ依リ其ノ速力ヲ概ネ一節迄増加シ得ルモノト判斷ス

六 自昭和十九年十一月二十五日。至同年十一月三十日間。海軍船舶司令部ニ於テ同艇ノ實用試驗ヲ再行シ速力其ノ他用法上ノ檢討ヲ實施ス

七 昭和十九年十二月六日。兵庫縣室津海岸ニ於テ海軍兵務行政本部、第十師電技廠研究所及海軍船舶司令部關係者參集ノ下ニ波號戰鬥艇二型ノ採否ニ關スル研究ヲ實施シ左ノ決定ヲ得

波號戰鬥艇ノ掩護用舟艇トシテ速力ニ波號戰鬥艇一型ノ整備ヲ希望スルモ今直チニ量産ヲ期ス

待シ得サルヲ以テ其ノ間本艇ヲ補足的ニ採用スルヲ要ス

八 以上ニ依リ波號戰鬥艇二型ノ研究ヲ終了ス

第四 試製波號戰鬥艇二型概説

一 目的用途

輸送舟艇ノ掩護ニ使用ス

二 構造機能ノ大要

本艇ハ鋼製艇ニシテ船体部、機部、電氣部、兵裝及屬品設備品ヨリ成ル。其ノ一般配置附圖第一、第二ノ如シ

1 船体部ハ船殼、操舵裝置、吊上裝置、繫留裝置、兵裝裝置、通風採光裝置及機裝品ヨリ成ル

イ 船殼

薄板熔接構造トシ主トシテ縱通材ニ依リ其ノ強度ヲ保持ス

ロ 操舵裝置

操舵室ニ設備セル操舵機ニ依リ艀端ノ二本ノ舵柄ヲ操作スル裝置トシ操舵索ヲ甲板下ニ通ス

ハ 吊上装置

船体重心ヨリ前後等距離ノ甲板上ニ吊上金物ヲ配置シ吊上索ニ依リ船体ヲ吊上クルニ使用ス

ニ 繫留装置

艀艀部ニ各二本ノ繫留柱ヲ又艀部ニ絞曳機ヲ設備ス

ホ 兵装装置

兵装取付ニ必要ナル諸設備ハ艀内通信設備ヨリ成ル。艀内通信設備ハ速力通信機及傳聲管ヲ用ヒ之ヲ左ノ如ク配設ス

操舵室 一機 艀 速力通信機 一

傳聲管 一

ヘ 通風採光装置

各室ノ通風採光ニ必要ナル通風筒、甲板明取、天蓋等ヨリ成ル

艀内各部ハ主機、補機、軸系装置、諸管装置、諸タンク類ヨリ成ル

イ 主機

六〇馬力「ジーゼル」機関二基トス

ロ 補機

手動冷却水「ポンプ」、手動海水「ポンプ」、手動燃料「ポンプ」及手動滑油「ポンプ」ヨリ成リ之ヲ艀艀室内ニ配設ス

ハ 軸系

中間軸、推進軸、推進器、舵尾管及張出軸受ヨリ成リ機艀動力ヲ推進器ニ傳達ス

ニ 諸管装置

海水管、海水管、燃料管、滑油管及排氣管等ヨリ成ル

ホ 諸「タンク」類

左ノ五油槽ヨリ成リ之ニ所収ノ計器、諸管、弁及「コック」類ヲ裝着ス

主燃料油槽 約 六三〇立入 一個 艀底左舷部油槽

補助燃料油槽 約 六〇〇立入 一個 艀底中央部油槽

滑油小出槽 約 六三〇立入 一個 艀底右舷部油槽

補助燃料油槽 約 八〇立入 一個

滑油小出槽 約 五〇立入 一個

電氣部ハ電源装置、始動装置、充電装置及照明装置ヨリ成ル

イ 電源装置

一二・二八〇AH蓄電池八個ヨリ成リ之ヲ主機軸ノ給動及照明ニ使用ス

ロ 給動及充電装置

現制鐵製大發動機ノモノヲ装備ス

ハ 照明装置

室内燈、投光器、舷燈及艀燈ヨリ成リ之ヲ左ノ如ク設備ス

室内燈 操舵室、機關室及兵員室

投光器 操舵室上部

舷燈 操舵室上部兩舷

艀燈 艀部後端

4 兵裝ハ三七耗舟艇砲、四式基筒及聯二〇耗高射機關砲、爆雷投下器、船艇無線機甲、車輛無線機丙ヨリ成リ之ヲ左ノ如ク装備ス

三七耗舟艇砲 (高射用) 一門 前部甲板上

四式基筒及聯二〇耗高射機關砲 (舟艇用) 二門 後部甲板上

爆雷投下器 二基 艀部甲板上ニ兩舷各一基

主要諸元

船艇無線機 甲 一基 操舵室内
車輛無線機 丙 一基 操舵室内

型式 鋼製淺吃水型
全長 一六・〇〇〇米
最大幅 三・五〇〇米
深サ 一・七〇〇米
自重 一一・二五噸
排水量及吃水

排水量	區分		
	荷重狀態		
吃水	常備狀態		
	滿載狀態		
平均	艀	艀	艀
〇・七七米	〇・五九米	〇・六八米	〇・八三米
〇・九四米	〇・六八米	〇・八三米	〇・九七米

出力 最大 九・八五 瓩

常用 約 九 瓩

航続時間 一〇〇時間

機 關

名稱型式及數量 六〇馬力「ジーゼル」機関(海水冷却單動四「サイクル」直

六筒直接噴射式)二基

出 力 六〇馬力(毎分一、五〇〇回轉ニ於テ)

第五 機(秘)密兵器ノ取扱區分

軍 事 秘 密

第六 研究擔任者

科 長 陸軍中佐 内 山 鐵 男

主任者 陸軍少佐 淺 香 好 朗

陸軍技術大尉 中 馬 章

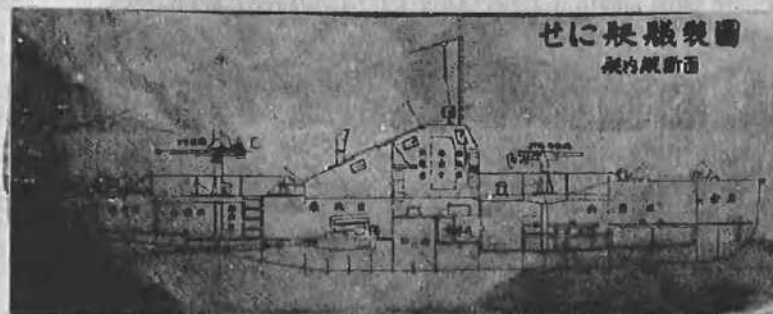
陸軍技術中尉 卷 淵 敏 郎

陸軍少尉 中 山 和 世

配 治 先

兵政本(一三)二研(一)五研(一)船司(一)船線(一)船廠(一)大造(一)

相 造(一)



附圖第一



附圖第二

12

驅逐艇第四型式研究報告

軍事極秘

十技研報第二二號(◎冊4)

規則第廿一條
適用

用済後焼却

第35部ノ内
第1號

昭和十九年十二月十五日
第十陸軍技術研究所

94

裏面白紙

驅逐艇第四型式研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年一月十三日附兵政技密第三九號訓令ニ據リ航空々冷發動機ヲ裝備シ空氣推進ヲ行フ驅逐艇第四型式ニ就キ研究ヲ開始ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

驅逐艇第四型式ハ所期ノ性能ヲ具備シ實用ニ供シ得ルモノト認ム

二 將來ノ處置

本艇ノ整備ヲ予期シ所要ノ兵器圖、仕様書及取扱説明書ヲ作製ス

第三 研究經過ノ概要

一 昭和十九年六月八日第三陸軍技術研究所ニ於テ擔任シアリタル本艇ノ研究ヲ繼承ス
承時迄ニ於ケル研究經過左ノ如シ

1 昭和十九年一月末研究ヲ開始ス

2 同年二月末基本設計ヲ完了シ、同年五月末細部設計ヲ概成ス

3 同年三月下旬横濱ヨット工作所ニ於テ整備途上ニ在リシ驅逐艇ノ艇体ヲ利用シ之ニ空

氣推進裝置ヲ附セルモノノ試作ヲ開始ス

4 繼承時ニ於ケル試作ハ約六〇%程度ノ進捗狀態ニ在リ

二 昭和十九年七月末試作ヲ完了ス

三 目昭和十九年八月四日至同年八月十日間横濱市鶴見沖ニ於テ本艇ノ第一回試験ヲ實施シ左ノ判決ヲ得（十技研報第四號）

「高速艇ハ其ノ運航ニ空氣推進法ヲ採用シ得ルモノト認ム

但シ同法ノ價值ハ「プロペラ」ノ適否ニ依ルコト大ナルヲ以テ研究ノ余力ヲ利用シ其

ノ改善研究ヲ續行スルヲ要ス」

四 前項ノ判決ニ基キ研究ノ余暇ヲ利用シテ「プロペラ」ノ研究及所要ノ改修ヲ實施ス

五 目昭和十九年十一月三十日至同年十二月四日間横濱市鶴見沖ニ於テ本艇ノ第二回試験ヲ

實施シ左ノ判決ヲ得（十技研報第一四號）

「驅逐艇第四型式ハ直徑二米九〇〇、鼻角約二〇度ヲ有スル木製「プロペラ」ノ使用ニ依リ速力三〇節以上ヲ確保シ得ベシ」

六 以上ニ依リ概ネ所期ノ成果ヲ收メ得タルモノト認メ昭和十九年十二月初旬其ノ研究ヲ終了ス

第四 驅逐艇第四型式概説

一 目的用途

四式二型驅逐艇（以下「二型」ト略稱ス）ニ同ジ

二 構造機能ノ大要

木製高速空氣推進艇ニシテ附屬ノ如キ一般配置ヲ有ス

(一) 船体部

1 船 型

二型ノモノニ同ジ

2 船体構造

イ 船体主要部材ノ構造及寸法ハ概ネ「二型」ノモノニ同ジ

ロ 主機台ハ^{F27}_{F30}間甲板上兩舷ニ「トラス」狀ニ組立テタル高さ二米三〇〇ノ樺製構造物トス

3 諸室配置

イ 甲板中央部ニ操舵室ヲ、甲板後部ニ機關操縦室ヲ設ケ甲板下ニ艙庫、予備室、無線室、ら號室、兵員室、彈藥庫、燃料「タンク」室、機械室、爆雷庫ヲ設備ス

ロ 操舵室ハ「ベニア」製構造物ニシテ前面及側面ニ窓ヲ、後部ニ出入扉ヲ又後方上部ニ通風板ヲ設ケ通信連絡設備ヲ有スル指揮所ヲ備ヘ之ニ操舵器、羅針盤、測力通信器等ヲ裝備ス

ハ 機關操縦室ハ開閉式天蓋ヲ有スル「ベニア」製構造物ニシテ前面ニ角窓ヲ側面ニ丸窓ヲ設ケ之ニ機關操縦ニ必要ナル諸裝置及計器類ヲ裝備ス

ニ 機微室ハ巡航機關一基ヲ有ス

4 舵

一個トシ之レヲ艙中央下面ニ設ク

5 其ノ他

イ 甲板上ニ「ピット」「フェアリーダー」「クリート」等ノ曳航繫留裝置ヲ設ク

ロ 操舵室後方及艙部ニ櫛ヲ積立シ其ノ間ニ空中纜ヲ展張ス

(二) 機關部

1 主機 關

主機關ハ航空々冷發動機（星型）二基トシ其ノ周圍ニ環狀ノ發動機覆ヲ有シ航空機用發動機架ヲ介シテ主機台ニ之ヲ裝着ス

機ノ冷却ハ「プロペラ」ノ後流及艇速ヲ利用シテ之ヲ行ヒ又其ノ回轉方向ハ兩舷機共船ヨリ見テ右廻リトス

2 「プロペラ」

四枚翼木製ノモノニ個トシ發動機「プロペラ」軸ニ直結ス、其ノ結合ハ航空機用「フアンブレーキボス」金具ヲ使用シテ之ヲ行フ

3 諸「タンク」

イ 艇内ニ左ノ「タンク」ヲ設備ス

燃料「タンク」(六〇〇立入)

(四〇〇立入)

ロ 機械台後部上方ニ左ノ「タンク」ヲ設備ス

燃料集合「タンク」(二〇〇立入)

滑油重力「タンク」(七〇立入)

4 巡航機關

船用六〇馬力ディーゼル機關一基及附屬裝置トス

5 其ノ他

所要部位ニ空冷式滑油冷却器、手動「ポンプ」、諸管、濾器、弁及「コック」類等ヲ設備ス

(二) 電氣部

1 電源

機關始動用、照明用及通信連絡用トシテ彈藥庫後部電池箱ニ二四V一八〇AH蓄電池ヲ裝備シ其ノ充電ヲ右舷機ニ直結セル二四V六五〇W航空機用直流發電機一基ニ依リテ實施ス

2 電氣機器

慣性始動機二基、照明裝置及通信連絡裝置等ヲ有ス

三 主要諸元

型 式	木製半排水型高速艇
全 長	一八米〇〇〇
最大幅	四米三〇〇
深 さ	一米七〇〇
自 重	一二屯五〇〇

排水量

常備狀態

一六屯〇〇〇

滿載狀態

一六屯六〇〇

吃水

常備狀態

〇米五八〇

滿載狀態

〇米五九〇

航續距離

約一八〇哩

速力

最大

三〇節以上

主機関

名稱型式數量 九七式八五〇馬力航空★冷發動機 二基

最大出力(公基當り) 七〇〇馬力(毎分二二〇〇回轉)

「プロペラ」

直徑 二米九〇〇

翼角(七五度半徑ニテ) 約二〇度

回轉數 毎分一五二二回轉(曲軸二二〇〇回轉ノ場合)

巡航機関

六〇馬力ディーゼル機関

一基

兵装

四式三七耗舟艇砲

一門

九八式二〇耗双聯高射機関砲

一門

爆雷投下機

二基

船艇無線機甲

一式

ら號裝置

一式

第五機(秘) 密兵器ノ取扱區分

軍事機秘

第六 研究擔任者

科長

陸軍中佐

内山 鐵男

主任者

陸軍技術大尉

佐藤 茂

陸軍技術中尉

島田 茂良

配布先
兵政本(二三)

陸軍技術中尉 西川 正 喜

裏面白紙



附圖 砲臺艦第四型一般配置圖 尺度 1/100

側面



平面



裏面白紙

12

十技研研報第一三號（〇フー）

鐵製大發動機切斷法研究報告

昭和十九年十二月十六日
第十陸軍技術研究所

101

裏面白紙

鐵製大發動機切斷法研究報告

第一 研究ノ起因

昭和十九年十一月二十九日現制鐵製大發動機ヲ切斷シ輸送ヲ容易ナラシムル必要ヲ認メ所案トシテ其ノ方法ニ就キ研究ヲ開始ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

鐵製大發動機ハ其ノ切斷及組立作業ヲ容易ナラシムル見地ニ於テ之ヲ橫方向ニ三分スルヲ適當ト認ム

二 將來ノ處置

鐵製大發動機ノ切斷工事要領書ヲ作製ス

第三 研究經過ノ概要

一 昭和十九年十一月二十九日現制鐵製大發動機ヲ切斷スル方法ニ就キ研究ヲ開始ス

二 昭和十九年十二月二日鐵製大發動機ヲ五体ニ切斷スル方法（第一案）ト三体ニ切斷スル方法（第二案）トニ關シ成案ヲ得

三 自昭和十九年十二月三日至同年十二月七日間野戰船舶本廠修理部金輪工場ニ於テ前項兩案 1

ニ依リ鐵製大發動機各一隻ヲ切斷ス

四 自昭和十九年十二月八日至同年十二月十日間野戰船舶本廠修理部金輪工場及其ノ附近海面

ニ於テ切斷セル鐵製大發動機ノ構造、機能及切斷法ノ適否ヲ檢シ左ノ判決ヲ得（十技研要第
一五）

鐵製大發動機ノ切斷ハ試製切斷鐵製大發動機第二案ノ方法ニ依ルヲ適當ト認ム

五 前項ノ結果ニ基キ第二案ニ依リ鐵製大發動機ヲ切斷スルコトトシ本研究ヲ終了ス

第四 鐵製大發動機切斷法概説

一 目的用途

現制鐵製大發動機ノ補給輸送ヲ容易ナラシムルニ在リ

二 切斷法ノ概要

切斷ハ舟艇橫方向ヲ三分ス

接合ハ山形鋼及「ボルト」ニ依ル

切斷及接合ノ要領附圖ノ如シ

三 組立舟艇ノ性能

組立後ニ於ケル鐵製大發動機ノ性能ハ切斷前ニ於ケルモノニ同シ

普通

第五機(秘)密兵器ノ取扱區分

第六研究擔任者

科
主任

長

陸軍中佐
陸軍少佐

内

山

錢

男

陸軍中尉
陸軍少尉

濱

田

彬

甫

配布先

兵政本(一三)大造(一)相造(一)船司(一)船練(一)

裏面白紙

13

十技研研報第一四號(◎舟ノイ)

木製大發動艇研究報告 其ノ二
(組立式合板製大發動艇ニ關スル研究)

昭和十九年十二月十七日
第十陸軍技術研究所

105

裏

面

木製大發動機研究報告 其ノ二

(組立式合板製大發動機ニ關スル研究)

第一 研究ノ起因

昭和十八年十月一日附兵政技機密第三〇號訓令ニ據リ現地組立可能ナル合板製大發動機ニ就キ研究ヲ開始シ昭和十九年三月八日附兵政技機密第五號訓令、同年六月十日附兵政技機密第一三號訓令及同年七月二十二日附兵政技機密第一六號訓令ニ據リ其ノ研究ヲ繼續ス

第二 研究成果ニ對スル判決及將來ノ處置

一 判決

試製組立式合板製大發動機ハ構造、機能概ネ良好ニシテ實用ニ供シ得ルモノト認ム
ニ 將來ノ處置

組立式合板製大發動機ノ整備ヲ予期シ所要ノ製作要領書及組立要領書ヲ作製ス

第三 研究經過ノ概要

一 昭和十九年六月八日第三陸軍技術研究所ニ於テ擔任シアリタル組立式合板製大發動機ノ研究ヲ繼承ス 繼承時迄ノ研究經過左ノ如シ

1 昭和十八年十月本艇ノ研究ヲ開始ス

2 昭和十九年一月其ノ設計ニ着手シ同年三月上旬之ヲ概成ス

3 同年三月上旬千葉工作所雇入工場ニ於テ其ノ試作ヲ開始ス

4 繼承時ノ試作ハ約八〇%ノ進捗狀態ニ在リ

二 昭和十九年七月上旬試作ヲ完了ス

三 自昭和十九年七月九日至昭和十九年七月十一日間試作工場内ニ於テ本艇ノ組立試験ヲ實施シ左ノ判決ヲ得(十技研報第一號)

「組立式大發動機ノ組立作業ハ容易ニシテ現地組立可能ナリ」

四 自昭和十九年七月二十三日至昭和十九年八月一日間東京灣岩井海岸附近ニ於テ本艇ノ海上運航及揚陸試験ヲ實施シ左ノ判決ヲ得(十技研報第三號)

1 組立式大發動機ノ海上運航性能ハ概ネ良好ナルモノト認ム 然レトモ構造上戰車ノ搭載困難ナルヲ以テ主トシテ人員、馬匹、貨物ノ輸送補給ニ使用スルヲ適當トス

2 本艇ハ實用ニ供シ得ルモ其ノ生命タル現地組立ヲ容易ナラシムル構造ニ於テ尙研究ヲ要スルモノアリ 然レトモ本研究ハ其ノ實施ニ相當ノ困難ヲ予想セラルルヲ以テ一應之ヲ中止シ折疊式大發動機ノ研究ニ重點ヲ指向スルヲ得策ト認ム

五 前項ノ判決ニ基キ一時其ノ研究ヲ中止シタルモ折疊式大發動機ノ研究意ノ如ク進捗セサル

ト大發動機ノ補給困難ノ虞ヲ加ヘタルトニ依リ昭和十九年十一月上旬再ヒ之ヲ復興ス

六 昭和十九年十二月上旬鐵製大發動機切斷研究ノ成果ヲ利用シ組立方法ニ一部ノ改良ヲ加ヘ
概ネ所期ノ成果ヲ收メテ研究ヲ終了ス

第四 組立式合板製大發動機概説

一 目的用途

機體ヲ分割製作シ現地ニ於テ組立テ使用シ得ル合板製大發動機トス

二 構造機能ノ大要 (附圖第一第二)

本機ハ船體部、機關部、廢品及予備品ヨリ成リ之ヲ五個ニ分割製作シ現地ニ於テ組立テ使用
シ得ル構造トス

1 船體部ハ船殼、操舵裝置、繫船裝置、吊上裝置、機裝品及揚鰯機ヨリ成ル

其ノ構造ハ左ノ諸項ヲ除キ概ネ現ニ整備シアル合板製大發動機ノモノニ同シ

イ 船首船底ノ逆V型ヲ平底トス

ロ 船幅ヲ三・二〇〇米ニ縮少ス

ハ 甲板ヲ四式木製大發動機ノモノト同一ニス

2 機關部ハ主機械、機操縱系統、軸系裝置、燃料裝置、冷却水管裝置及排氣裝置ヨリ成

ル

其ノ構造及機能ハ概ネ四式木製大發動機ノモノニ同シ

3 分割ハ附圖第一ノ如ク船體前後部各一、中央部三個ノ五体トス

分割部體中船底外板、竜骨、船底縱通材、船側補強材及船側外板ハ其々接合部ニ銅板ヲ裝

着ス (附圖第二)

組立ハ各部材ノ銅板ヲ「ボルト」ニ依リ結合シテ之ヲ行フ

三 主要諸元

型 式	合板製平底型
全 長	一五・〇〇〇米
最大幅	三・二〇〇米
深 サ	一・六〇〇米
自 重	約七・五〇〇噸
平均吃水	
輕荷狀態	〇・四〇〇米
滿載狀態	〇・七九〇米

特設

(1) 武裝兵

八〇名

(2) 馬匹

一〇頭

(3) 貨物

八噸

巡航速度

七、五節

滿載狀態

五個

組立部体數

機關

名稱型式

船用四式直六筒「シ」ゼ「ル」發動機（純船用之機關）

出力

八〇馬力（毎分二、五〇〇曲轉）

普通

第五 機（秘）密兵器ノ取扱區分

第六 研究擔任者

科長

陸軍中佐

佐

内山

鐵

男

陸軍少佐

佐

淺香

好

朗

主任者

陸軍技術中尉

連

井

浩

世

配布先

兵政本（一）三研（一）四研（一）相造（一）船司（一）船練（一）船廠（一）



裏面白紙

